家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

12

55. 1. 7
附属図書

第七十八巻　第十二号　日本幼稚園協会

子どもに読んで聞かせる話。

全6巻

ゴンとホットケーキ

作・村山桂子／絵・長 新太　160円
A5判 132頁 750円 〒200円

きつねの ゴンは おばあさんの やいている ホットケーキが たべたくなり ミカちゃんに ばけて おばあさんの いえに いきました…。おばあさんときつねのゴンの楽しいお話。他9編。

おすましがあこちゃん

作・わたり むつこ／絵・山本かずこ
A5判 136頁 750円 〒160円

あひるの があこは、かがみの まえで きれいな レースの かたかけを みつけました。「これ、おかあさんの よそいきだわ。ちょっと かけてみようっと…。ちょっぴりいたずらでかわいいあひるの物語。他7編。

かぜのふえ

作・絵／やなせ・たかし
A5判 146頁 750円 〒160円

のはらで あそぶのが だいすきな けんちゃんは あるひ のはらのなかで ぎんいろの ふえを ひろいました…。けんちゃんと銀色の笛が織り成す不思議なお話。表題作の他に「ものまねからす」など19編。

こぶたのぶうくん

作・小沢 正／絵・渡辺有一
A5判 136頁 750円 〒160円

おふろが きらいな ぶうくんは、おかあさんの いうことを きかずに、はだかのまま のはらを どんどこ どんどこ にげていきました。セッケンと タオルと あらいおけが あとを おいかけて…。他7編。

まいごになったきゅうこうれっしゃ

作・前川康男／絵・織茂恭子
A5判 192頁 900円 〒160円

やすしと ちいちゃんは いなかの おばあさんの いえに いきました。ふたりは そとへ あそびに でかけたのですが たいへんなことに…。仲良し兄弟2人の夏休みとはいったいどんなお話でしょう 他9編。

くまのくまた

作・絵／さとう わきこ
A5判 144頁 750円 〒160円

くまたは「たしざんなんて かんたんさ」と、うれしそうに いった。「りんごたす りんごは りんごりんご。りんごたす みかんは りんごみかん……」みんなは、この変なたし算に夢中になってしまいました。他7編。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八巻　第十二号

幼児の教育　目次

——第七十八巻　十二月号——

表紙　油野誠一
カット　中島英子

これからの幼児教育……牛島義友…(4)
ルソーの夢
——むすんでひらいて考——(その十五)……海老沢　敏…(6)
私の保育観……角尾和子…(14)
私の保育……水野行恵…(20)
日々新……堀合文子…(26)

© 1979
日本幼稚園協会

ダンスの変遷史 (二)……興水はる海…(30)

世界の子どもたち
保育者からリタラシー・ワーカーへ……永井康子…(36)

遊びと子どもの発達 ②
〈悪口うたの遊び〉……加古里子…(41)

子どもと天体……塚田幸子…(46)

保育の体験と思索
——子どもの世界の探究——(二十九)……津守真…(52)

第七十八巻総目録……(61)

編集委員 中村英勝・村石京子
本田和子・田中三保子
編集主任 津守真・皆川美恵子

これからの幼児教育

牛島義友

我がくにの幼児教育や高等学校の就学率は九〇%をはるかに越して教育の普及率は世界の最高水準に達した。また幼稚園と保育所の階層的格差も小さくなり、社会的ニードにしたがってそれぞれ活用されている。施設の設備も全国的に差が小さくなり、地方にも中々設備の整ったものが見られるようになった。御殿場市などは特殊な防衛関係からの収入でモデル校を造ろうと張り切っている。

また障害児の保育所も普通幼児の中に取り入れられつつあって、すべての子どもが等しく教育される姿になりつつある。

この恵まれた条件における今後の幼児教育の方向としては国際的教育と個性教育がその指導目標となるのではなかろうか。

本年は国際児童年であったが、以前はこのような機会に日本の子供をめぐる悪条件を指摘して、子供を守る運動を展開したものであるが、今回はそれに代って、世界の子供、特に発達途上国における恵まれない子供の方に目を向けられたことは、それだけ日本人の目が世界的に開かれたということであろう。しかし多年の伝統から閉鎖性が強く、ヴェトナム難民に対しても金は出すが国内に引き受けようという態度は弱い。また我が国は世界経済の調節、世界平和の橋渡しという役割りが要求されるにも拘らず、積極的に働らきかけることが少なく、またこのために必要な国際語の駆使ができない。日本人は外国語をしゃべることのもっとも下手な民族と言われる。したがって幼児期から国際的視野を広め、国際語（具体的には英語）を話す教育

を開始する必要があろう。

他方、教育の個性化、多様化が要求されよう。子供たちには能力、性格においてそれぞれ相異があるので、それが生かされる教育でなければならない。障害児を正常児と共に教育することは大切であるが、これは障害児のすべての機能が正常児と同じようになることを目ざすものでもないし、またこのために正常児の教育が足踏みさせられても困る。どのような子供も人として尊敬し、共に社会に生きることを教え、一方能力ある者には弱い者を助けたり全体をまとめて行く指導性の教育に向けるべきである。また外国で育つ者もふえたが、日本に帰ると全然外国語を話さなくなり、忘れてしまう場合も多いが、これほど無駄なことはなく、この特殊な能力をさらに伸ばすような指導が必要であろう。

また音楽などは幼児期から特に発達する能力であり、絵画、数（特にそろばん）等才能教育として著しい効果をあげるものもある。子供の興味、能力によって特殊な分野に伸ばすこともまた今後の教育にとっては特に必要なことであろう。すべての子供がいわゆる単一のエリートコースを求めて、受験競争に走ることはより多くの落伍者を生む教育地獄が現れるだけであろう。さまざまの分野で自分の才能をのばし、社会的役割を果して行かねばなるまい。

このためには画一的教育がもっとも非難さるべきものとなろう。今までは教育の機会均等の名のもとに個性教育が軽視される傾向があった。すべての子供が教育され、教育の普及が実現したのだから、これからはすべての子供がそれぞれ十分に伸ばされる密度の高い教育が必要である。このために思い切ってカリキュラムを撤廃するオープンラーニングも必要であり、また幼児教育ではこれをもっとも導入しやすい。津守先生は知恵おくれの幼児の教育に当り、この方法に徹し、一見無計画、放任的のようであるが、いじけた動きのない子供たちも生き生きと生活を楽しむようになっている。また真に個性的に生きるためには、いわゆる根性が必要である。興味が多方面に散るのではものにならない。今日の恵まれた家庭環境、あるいはソフトムードの保育はこの根性を生むのに適していない。自由と厳しさ、自分が選んだ道に対し、最後まで徹底的に責任をとらす教育が真の個性教育である。

ルソーの夢

――むすんでひらいて考――（その十五）

海老沢　敏

十、遊戯歌としての《ルソーの夢》（承前）

フリードリヒ・フレーベル（一七八二―一八五二）が長年に亘る国民教育の構想の一環として幼児教育について具体的な計画を重ね、いわゆる〈キンダーガルテン〉の名称をもつ施設を実現したのは一八四〇年のことであった。この年の六月二十八日にブランケンブルクで催された〈一般ドイツ幼稚園（デル・ルゲメイネ・ドイツチェ・キンダーガルテン）〉の創立式典こそその記念すべき機会であった。一八四〇年代はこのフレーベルの幼稚園活動が実践的にもまた理論的にも発展を遂げた時代であった。だが一八四八年の革命が挫折したことで反動が招来されると、たちまちにしていわゆる〈幼稚園禁令〉が発布され、フレーベルの幼稚園活動は政治的な判断のもとで禁止されるにいたる。一八五一年のことであった。この禁令が廃止されるのは一八六〇年であり、そのころにはフレーベルはすでにこの世にはいなかったのである。

この禁令が効力をもっていた一八五〇年代にも、フレーベル主義の幼稚園運動はドイツで地道に続けられていくのであったが、

活潑な活動力はむしろドイツ以外の地で発揮されていくのである。国内、国外を問わず、こうした〈フレーベル運動〉推進の中心人物であったのはベルタ・フォン・マーレンホルツ＝ビューロウ夫人（一八一〇―一八九三）である。マーレンホルツ＝ビューロウ夫人はフレーベル〈キンダーガルテン〉を英国にも紹介した最初の人物ともいわれるが、じつはおなじ時期に、もうひとり別のドイツ人とその夫人によって、じっさいにはマーレンホルツ＝ビューロウ夫人の英国訪問に先立って、〈キンダーガルテン〉の移入がおこなわれているのである。それはドイツで〈幼稚園禁令〉が発布されたまさにその年の一八五一年のことであった。(注2)

（注2）　こうした点については以下の文献を参照した。

世界教育史研究会編《世界教育史大系21―幼児教育史Ⅰ》（講談社・昭和四九年）

岩崎次男・林信二郎・酒井玲子・白川蓉子・阿部真美子・山口一雄著《フレーベル　人間の教育》（有斐閣新書・昭和五四年）

それはヨハネス・ロンゲとベルタ・ロンゲの夫妻であり、彼らは一八四八年のいわゆる三月革命の挫折にともなって、一八五一年ドイツから英国へと亡命したのであった。ロンゲはフランクフルト連邦議会議員ともなったカトリックの神父であったし、夫人のベルタはフレーベルの幼児教育思想の共鳴者であった。こうしたロンゲ夫妻は、ロンドンのハムステッドに住んだあと、〈タヴィストック街区三二番地〉に移り、ここの住居の一部を礼拝堂に改造し、〈人道教（レリジョン・オブ・ヒューマニティ）〉の宣教活動を開始するとともに、おなじ邸内で幼稚園もひらいたが、この幼児教育はすでにハムステッド在住の折にはじめられていたと考えられる。

〈タヴィストック街区三二地番〉は、すでに紹介した《キンダーガルテン・リーダー》の出版者ボルツキーの所番地とまさに同一のものであることが理解されるだろう。加えてこの曲集には〈ロンゲの入門書に収められた三十二曲の歌曲を含む〉と記されている。実際、ロンドンのこの地区の一画で、英国における〈キンダーガルテン〉の運動が押し進められたのである。

そのロンゲ夫妻には《英語キンダーガルテン実用案内書》(注3)なる著書がある。

（注3）《A Practical Guide to the English Kindergarten, (Children's Garden,) for the use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers: Being an Exposition of Froebel's System of Infant Training: Accompanied by a Variety of

Instructive and Amusing Games, and Industrial and Gymnastic Exercises, also Numerous Songs Set to Music, and Arranged for the Exercises by Johann and Bertha Ronge. London: A. N. Myers & Co., 15, Berners Street, Oxford Street, W. 1855. 〔10th Edition：1877.〕》

ロンゲ夫妻がこの書物を著わしたのは、どのような理由であったろうか。それは夫妻による初版の序文が語ってくれる。この《実用案内書》はフレーベルの幼児教育（インファント・トレイニング）の体系の実際的入門書であるが、フレーベルのシステムは先立つあらゆる幼児教育法よりもはるかに改善されたものと認められている。このような〈キンダーガルテン〉はドイツではすでに長い前から設立されていたものであるが、英国民の性格や習慣に適合したかたちでのシステムは、この国には一八五一年に導入されたのである。はじめはこうした新しい教育法にはわずかの父兄しか関心をもってくれなかったが、一八五四年にセイント・マーティンズ・ホールで開催された教育博覧会が公衆の前にこのシステムを紹介するのにあずかって力があったのだ。この博覧会には数々の玩具が展示され、ロンゲ夫人がその使用法を講義したものであった。こうした過程をへて〈キンダーガルテン〉はいっそうよく知られるようになり、父兄や教育に関心のある人たちの訪問が増えたのである。こうして玩具の使い方を父兄や保護者たちに知ってもらう目的でこの書物は書かれたのだ。

この論旨のうちにみられるように、ロンドンで一八五四年教育博覧会が技芸協会の手でひらかれたが、マーレンホルツ＝ビューロウ男爵夫人などはこの機会に英国に渡り、フレーベル主義をひろめる努力をしているのである。

第二版の序文（一八五八年）で、ロンゲ夫妻は次のように語っている。「〈キンダーガルテン〉のシステムを確立するというきわめて困難な仕事の方は、まず一八五一年にドイツ〔ドイツ語〕で、一八五四年に英国〔英語〕で果されたが、この一八五四年には、たったひとりの英国人――すなわちF・H・ヒル氏（著名な郵政大臣の兄弟）が氏の子供たちを当時英語にあった唯一のキンダーガルテンに送ってきたのであった。このキンダーガルテンは私たちによってタヴィストック広場三二番地で経営されていた。」

《世界教育大系21―幼児教育史Ⅰ》第四章第二節でも指摘されているように、〈ドイツで〉、〈英国で〉とあるのは〔　〕内のように〈ドイツ語で〉、〈英語で〉の誤まりであろう。問題は英国での〈キンダーガルテン〉の設立であり、このフレーベル主義幼稚園がドイツの亡命者によってはじめられたことからも推測され

るように、当初は英国の首都ロンドン在住のドイツ人の子弟を対象として、したがってドイツ語でおこなわれ、一八五四年からは英国人の子弟も加わったことで、英語に切り替えられたものであろう。こうした両国併用(バイリンガル)のかたちは、すでに紹介した《キンダーガルテン・リーダー》の《ルソーの夢》の〈ドイツ語および英語の歌詞つき〉からも理解されることだろう。通常の楽譜、すなわち歌曲の楽譜では歌詞は旋律線の下方、大譜表ではその譜間に書かれるのであるが、それはこの《ルソーの夢》の場合、《美しい(ファイン・シューネス・)眺め(アングリック)》のドイツ語歌詞ではなく、《楽しい眺め(ザ・プレザント・サイト)》の英語歌詞がその位置にあり、前者すなわちドイツ語歌詞は大譜表上段に置かれているのである。これはすでに英語中心でありながら、ドイツ人の子供たちのためにドイツ語歌詞をつけ加えているかたちではないかと思われる。

さらにこの第二版の序文を読み進めてみよう。ザクセン地方で成功を収めたところの幼児教育のプラン、すなわちフレーベルに発するこのシステムについて、序文では次のように説明されている。「このシステムは知的なものではあるが、真に幼児のものである。それは子供を子供として扱い、子供が自分たちで考えるよう力づけ、子供にふさわしい玩具や方法で子供が仕草においても、象形文字のような書きぶりにおいても、しだいしだいに自分自身の考えを発展させ、自分自身の物語を語り、そして他の子供たちの話を聞くことを教える。むずかしい名前は使わないし、《垂直的》ないし《水平的》歌唱も用いないで、言われるもの、なされるものはなんでもまったくすべて子供のものであるようなかたちである。このシステムの大きな特徴は《夢中になること(オキュペーション)》である。」

いわゆる〈恩物〉を用いての無心の遊びなど。「こうした《無心(オキュペーション)の遊び》に取り合わされるのは歌(ソング)と遊戯(ゲーム)であり、また甘美な憩いのはだざわりの柔らかなベッドである。」私たちはここでフレーベルが《人間の教育》その他の論稿で唱歌と唱歌教育の意義について論じていることを知っているが、フレーベルの幼稚園〈キンダーガルテン〉の実際的な指針であるこの英語の書物でも、音楽はさらに敷衍されたかたちで幼児たちの教育の中に積極的に位置づけられていくのである。

それについてはすぐ立ち戻って来ることにして、ここではフレーベルの〈キンダーガルテン〉の英国における反響についてつけ加えておこう。第二版の序文はそれについても語っているからである。この《英語キンダーガルテン実用案内書》は、まさに〈イギリスにおけるフレーベレ主義運動の最初の文献〉(注4)であり、前の年の教育博覧会での〈キンダーガルテン〉の紹介が評判を呼んで

いたこともあって、当時の雑誌がこの書物を取り上げて論じることが多かったといわれる。その中に当時の名高い大作家チャールズ・ディッケンズが主宰する《家庭の言葉》があった。その第二七八号（一八五五年七月二十一日号）にはフレーベルとその幼稚園活動についての長くも好意的な紹介記事が掲載された。この文章はじっさいにはディッケンズのものではなく、「編集スタッフの一人で教育改革家である〈ヘンリー・モルレー〔モーリ〕〉が書いたものである」[注5]が、ロンゲ夫妻にとってはこの紹介記事は感激的なものであったにちがいない。彼らはこの記事を引用さえしているのだ。

（注4）《世界教育史大系21—幼児教育史I》三〇一ページ。

（注5）同右書三〇二ページ。

「この書物を私たちは、私たちがここでできる以上にフレーベルのシステムの詳しい知識を得たいと望んでおられる方には誰れでも参照していただくようお勧めする。この本はそのシステムがどんなものかを説明しているだけでなく、ちょっとしたこまかい実例（スペシメン）をふんだんに使った、誰れにも、ただちに家庭でこれを研究し、それを積極的にやってみることを可能にしてくれるのである。それは会話や遊戯を具体的に提案してくれるし、多くのフレーベル歌曲（ソング）を与えてくれるほか、会話や遊戯につけて歌われるような音楽（これはふつうポピュラーな節（チューン）——たとえばメアリー・ブレイン、ルソーの夢〔傍点筆者〕等々から成っている）さえ与えてくれるのである。」

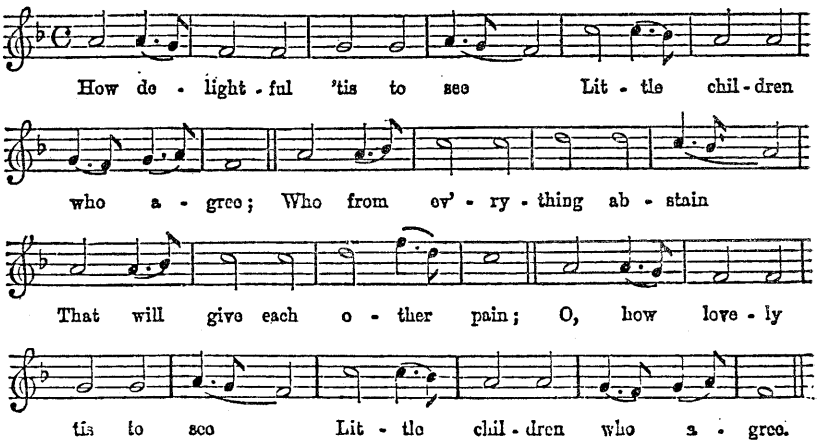
この引用文から、この《実用案内書》には《ルソーの夢》が遊戯用の曲として採用されていること、さらには《ルソーの夢》が、一八五〇年代の英国でなお〈ポピュラーな節〉として親しまれていたことが知られるのである。

事実、この《英語キンダーガルテン実用案内書》の終章は〈音楽（ミュージカル）体操的運動（ジムナスティック・エクササイズ）〉と題されている。そしてその中にほかならぬ《ルソーの夢》の旋律が〈準備（イントロダクトリー）の歌（ソングス）〉の第二曲として掲げられているのである。それは《楽しき眺め（ザ・プレザント・サイト）》（The Pleasant Sight）と題されている（譜例②）

この章のはじめに同章の意義が明確に打ち出されている。「これらの（運動（エクササイズ））はまことに重要な意味をもっている。なぜなら子供たちは飲食物を要求するばかりでなく、新鮮な空気、光、陽光の作用、それに十分段階づけられた運動をもとめるものである。〈健全な心は健全な肉体にのみ宿る〉とキケロは語っている。」ロンゲ夫妻はフレーベルが身体運動を幼児教育の本質的な部門とし

▼ 譜 例 ②

THE PLEASANT SIGHT.



て捉え、その後継者たちがこのシステムを発展させたことを指摘した上で〈英語キンダーガルテン〉ではさらに英国の風土や習俗に適合するように修正していると語っているが、子供たちの健康を保つためにはさまざまな配慮が必要なことを強調している。その上でキンダーガルテンの運動は次のようにおこなわれるのである。

第一に背椎の疲労を避けるために、子供はひとつの姿勢を長く続けていることが許されない。

第二にみんな一緒にやることを確実にするために動作はすべて適当な歌に伴なわれる。（傍点筆者）

第三にこうした運動や遊戯はひじょうに幼ない子供たちに合わせてある。それらは子供たちによって発明され、実際に教師たちによって集められ、かつ適切な歌詞をつけて音楽化される。(注6)（傍点筆者）

（注6）《英語キンダーガルテン実用案内書》四三ページ。

この章で実際に運動につけられる歌は全部で三十一曲あるが、(注7)それらは二曲の〈準備の歌〉のほか、〈自然ならびに人工的動作の模倣〉十三曲、〈人間の仕事の模倣〉四曲、〈調和のゲーム〉十二曲に分かれており、第二のグループには〈鳩小屋〉、〈カッコ

ー〉、〈魚〉、〈太陽系〉、〈風車〉といった種類のもの、第三グループには〈農夫〉、〈こびき〉など、最後のグループには〈子供の挨拶〉、〈小ちゃな体操の先生〉といった題がつけられ、かつそれぞれに子供たちがどのように遊戯するかのやり方が説明されているのである。ここではそうした〈遊戯歌〉の詳しい説明に立ち入ることはできないが、ほかならぬ《ルソーの夢》の旋律による《楽しい眺め》は第一曲の《仕合せなおうち》とともに「これらの歌や同種の歌は運動のはじめ、および第三、第四恩物によるいくつかの遊戯のあいだに歌われる」と指示されている。

（注7）番号は三十三番までつけられているが、第七番、第三十二番が欠けているので三十一曲となる。

こうして《ルソーの夢》は、今や〈遊戯歌〉として、フレーベル系のキンダーガルテンの中にも確固としてその役割を見出したものであった。〈キンダーガルテンリート〉としての《ルソーの夢》の特徴はおよそ次のとおりである。これは〈準備の歌〉として、遊戯的な運動に入る前に歌われるものであるが、恩物による遊戯とも組み合わされており、幼児たちの身体運動と結びつけられている。そのうちに身体運動を支えるものとして、当然、単旋律、ユニゾンで歌われる。譜例でも明らかなように、曲はヘ長調、四分の四拍子を取り、その旋律形は、本稿第八章の異稿対照表では2と1の混淆を示している。次にこの旋律で歌われる歌詞を訳出しておこう。

小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんと楽しいことだろう。
彼らはおたがいに苦しめるようなことは
なんでもこれを差し控える。
ああ、小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんとすばらしいことだろう。

彼らは喧嘩の言葉はしゃべらず、
約束はけっして破らず、
冷たい顔はけっして見せない。
両の眉毛にはにこやかな愛がある。
ああ、小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんとすばらしいことだろう。

彼らの心と思いを一つにして、

礼儀正しく、情深く、親切だ。
他人を許そうとし、
生きとして生けるものを仕合せの世にする。
ああ、小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんとすばらしいことだろう。

おうちでも、学校でも、遊んでいるときも
彼らはごきげんで浮き浮きと陽気だ。
いつだってひとのよろこび、人たちの間の平安を
　いやまそうとしている。
ああ、小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんと仕合せなことだろう。

もし私たちがおたがいに気をつかいあい、
他人の重荷をみんなおたがいに背負いあえば、
人類はやがてすぐにも
幸福な一家のようになるだろう。
ああ、小ちゃな子供たちの仲良し姿を眺めるのは
なんと仕合せなことだろう。

（つづく）

（国立音楽大学）

懸賞論文募集のお知らせ

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。
一、応募期日　昭和五十五年九月末日まで
一、応募要領　ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。
一、賞金及び賞品

最優秀賞	一名	賞金二十万円
二等賞	二名	五万円
三等賞	三名	一万円
参加賞	全員	記念品

一、問合わせ及び応募先
〒112　東京都文京区大塚二―一―一　お茶の水女子大学附属幼稚園内　日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

主催　『幼児の教育』編集部
後援　株式会社コーディック

私の保育観

角尾和子

難儀なテーマを眺めて夏を越してしまった。思いついて先輩のものを読んで、なるほど。そこで、先ず、

○「私の背景」について

私の年頃（年配？）で幼児教育の関係者の多くは、倉橋惣三先生の教えをうけている。関西で「私は森川正雄先生の教え子です。貴女は？」と挨拶を受けたこともある。残念乍ら私はそれらの日本の幼児教育近代化の父、先達から教えを受ける機会をもたなかった。だから……それだけでもないが、私の保育観は独学である。師範学校で空襲警報を聞きつゝ教職者の道を学んだことや、その後力量不足を補いたくて学んだ心理学の研究が、見え隠れするという批評は否めないけれども、〝保育〟という幼ない者たちへの関わり方については、やはり独学というのがふさわしい。具体的には、クラスの幼児、夫（角尾稔）を含めて縁のあった人々、ひとり子の息子の育児、あちこちの幼児教育現場の見て歩き、等々の中で、聞き、確かめ、そして蓄積されていったとでもいえようか。

蓄積したものの中には、自分の考えの基本になって変らないものもある一方で、現在もなお迷いつつ模索中のものもある。

そのようなわけで、今風に云うと「私の」は独断と偏見に満ちたものであることをお断りしておいて、気楽に求められた紙数まで埋めさせていただくことにする。

○いつの間にか「子どもは自ら学ぶ」と信ずる様になった

数年前のある研究会の席上のこと、私の発言の中の「大切なのは〝待つ心〟である」というのをとらえて、会場の人から「目標・内容を整えた指導計画の作成と、どう切り結ぶか、ぶつけて見たかった。」と指摘をうけてハッと気づいたのが、いつの間にか……であった。

子どもはひとりひとり自分に必要な事柄を自分で学びとる力を持っている。しかし周囲の大人の都合に合わせてはその力を発揮しないから、大人たちは手前勝手に催促をする。子どもからその力が出てくるのを見守り、待つ心が大切である、と真底から思っている自分を発見したのは、その時であった。

ひと頃私は、幼児の指導を考える時に、目標から日々の活動まで、論理的に発展させる工夫はないかと思案していた。その頃の子どもの見方と、〝待つ心〟を大切とするときの子どもの見方は大きな変化がある。それにもかかわらず、昨日から今日にかけて急に看板がかけかわるというものでもないので自分では気づかずに日を過ごしていた。

「子どもは自ら学ぶ」このことを、人々の口から聞いて新鮮に感じたのは、創美(1)の活動の中である。（一時は創美の事務局を引き受けて山のような郵便物の処理に忙殺されたことがある。）

創美の人々は、

「目と手の訓練の美術教育は過去のものである。教師の権威を押しつけて指導してはならない。子どもは生まれ乍らにして、誰に教えられたのでもなく乳を飲む術(すべ)をしっているではないか。あの子ども自身がもっている自発性、生命力を発揮させて、子ども自身の自己を表現させよう。それが今の指導である。」

と熱情あふれんばかりに説いていた。今もその人々の顔やしぐさを、声音とともに思い出すが私はその頃、創美の人々の感動の渦の中で、「子どもは自ら学ぶ」ことをどうも頭でしか理解していなかった様だ。

その後創美の仲間の人々の実践を見、聞き、自分もそのあとをなぞる様にして、クラスの子ども達の成長に関わり、とくに我が子の成長につきあううちに「子どもは自ら学ぶ」と確信をもつ様になった。

そんな時期に、今は廃刊になった〝放送朝日〟の対談の記事の

中に、黒丸[2]氏の研究がのっていた。

「健康体で生まれた新生児は、生まれ乍らに四つのリズムをもっている。そしてそれらはその後の生命維持、栄養補給、周囲の人との交渉にまで大きな役割りを果たす。」概略その様な記事であった。ふた昔以上前に信州で、幼年教育の合宿研究会があった時、夕食ごとに講師の末席に連なって、興味深い話を聞いた黒丸氏の、その後の研究のたよりは、懐かしさと一緒に「人間は生まれ乍らに、自分で生きる力をもって生まれて来ているのだ。」と大きな感動をもたらしたものであった。

「子どもは自ら学ぶ」と信じて読む〝育ての心〟〝幼稚園保育法真諦〟は、すなおに心に落ちてしみとおり、保育に関わり始めの頃とは、考えることもすることも変わってきた。

○〝幼児の絵は生活している〟をめぐって

宮[3]武辰夫氏は幼児の描画指導の著書に、右の名をつけた。常々「コックレル氏曰く、子どもの絵はその子どもの心をのぞく眼鏡である」と説かれていた。四ツ切り画用紙に不透明の水絵の具でかいた幼児画（三百枚くらい）を次々にめくりながら、描いた子どもの生活、心の中を見とおす話を私が宮武氏から聞いたのは今から二十八年前であった。

迂闊な私は

「先生それを描いた子どもの顔を全部おぼえておられますか」と聞いた時の太い黒ぶちの眼鏡の奥でギロッと光った目と

「それが分からなくて子どもの指導はできません。」という恐い声は忘れられない。

そんなイキサツがあったのに私は自称東京の弟子のひとりとなり、亡くなられるまで、十年ほどの間に、子どもの絵は、その子どもの生活の記録であること、生活の善導なくして絵の指導はないことを学んだ。

宮武氏から学んだことに加えて、子どもの絵の見方の訓練は創美の活動でもうけた。

川[4]村浩章氏は「日本の児童画は、創美の出現によって、数年にして一変した」と云っているが、その創美のユニークな活動のひとつに、〝公開審査〟や〝絵のみかたを学ぶコンクール〟があった。それらは参加者各自、あるいは審査員が、選び出した絵について、何故この絵を支持するかを説明し、他の参加者と討論するのである。この時つかわれていた言葉は、私のそれまでの生活の中では聞いたことのない種類のものであった。

曰く「概念的でない。」曰く「デリケートな、それでいて積極的な

精神が満ちている。」曰く「感情は割合いと整理されているが、静的であって動的でない。」等々である。はじめは、選ばれる絵にも首をかしげたし、討論に用いられている言葉もチンプンカンプンであったが、回を重ねてそのコンクールに参加するうち、自分の絵の見方というものに少しずつ自信が持てる様になっていった。今にして思えば「日本の児童画の一変する」その数年の間を創美の中にいたことになるが、その間、絵の見方を学ぶ中で、私は人間の教育の基本にふれることができた様に思う。

画用紙の片隅にコソコソと描く子や、小さく描いたその上をきたなく塗りつぶした絵を描く子は、何か屈託があって自己を十分に表現できないでいる子どもである。この子どもたちに必要なのは、「もっと大きく描きなさい。」等の絵に直接する指導ではない。もっと広い生活の指導が必要である。教師は子どもの心の屈託の原因を見つけることを第一にすべきである。そして子どもが自分でそれを乗り越える事が出来る様に勇気を湧き出させなければならない。子どもが自分で屈託をのり越え生活に自信がもてたなら必らずその次に描く絵にはのびのびとした表現がみられるであろうし、教師は子どもが自己を十分に表現して心に屈託がなく満足する境地にまで導びいてやることがこの場合の指導である。そんな実践に近づこうと私自身努力する中で、人間と人間のふれ合い、ぶつかり合いの中で教育が行なわれていくことを実感として受けとめる事ができたのは幸せであった。

今私は、保育者養成の学校の一隅で、あらためて人間の教育を考えている。真の保育者養成は、保育の技術や知識の片々を教えるのでは足りない。人間の教育が必要である。心の豊かな、巾と厚みのある人間を育てるにはどうしたらよいのだろうか。この思いは、私自身の人間修業の至らなさへも繋がる。難かしいけれども努力しなければならないと考える日々である。

○想像の世界への入口を捜す

幼児期から想像力を豊かに養うことは、その子どもの将来を考えた時にも大事なことである。

子どもがごく幼ない時には、目に見えない想像の世界をみることはできない。レールの上を走る玩具の汽車が、トンネルの中に隠れた時にでも、その汽車の行方を想像できない時期がある。その子どもが言葉を理解してつかう様になるに従って、目にみえない世界も想像できる様になっていく。

この想像の活動は事物に即した直接的な経験の機会が増えるほど、自由に幅広い想像ができるようになっていく。

さらに成長して、この想像の力をかりて、歴史・文学・地理・諸科学の原理、そして数学なども理解していくのである。

ひとりの人間にとって大切なだけでなく、科学の進歩、偉大な理論を生み出す仮説を産みだすのも想像力の働きなしには考えられない。

このように大切な想像力も、ジャンニ・ロダーリ氏[5]が「ファンタジーの文法』の中で、「現在の学校ではもっぱら〈注意力〉と〈記憶力〉が大手をふって闊歩し、〈想像力〉はそのあわれな親類として扱われている」と嘆いているが、想像力の働きの偉大さを認めているのか、いないのか、教師はその育成に十分な配慮をしていないのではないかと、気遣われてならない。

「絵本・紙しばいに親しみ、想像力を豊かにする」これは、領域・言語の中のねらいのひとつであるから、保育者は、想像力を豊かにする事を考えてはいる。しかし絵本、紙しばいだけでよいのだろうか。又絵本については[6]A・ラマチャンドラン氏の次のことばもあることを指摘したい。彼は、

「物語があって、それに絵をつけていくと、そこでは必ず『言語的』なさし絵をつけがちとなる。」「世界中どこにでも、子どもの文学には〝空想する〟という特性があるにもかかわらず、おかしなことにはさし絵にはそれがない。今までのさし絵は、いってみれば、イメージを言語的に解訳したものにすぎない。絵がそれ固有のイメージをつくりだしてはいない」と述べている。

仮りに子どもが絵本の物語を、読み聞かせてもらったとする。子どもは自分のもてるものをすべて動員して、様々に物語りの世界を想像したとする。その時問題となるのは見せられている絵本の絵によって子どもの想像がそこに立ち止まってしまうかもしれない。画家の解釈しかないと思ってしまうかもしれないことである。

その意味からはTVが、子どもの生活の中に占める場が広くなってから、TVの良さと同時に損うものが多いことが云われて、ラジオや、素話しを聞かせようと保育の場の見直しがあるのはよいことだと思う。しかし耳で聴いて人の話をもとに子どもが想像するだけではまだ不足の様に思う。

ブライアンウェイは[7]『ドラマによる表現教育』の中で「想像力を育てるには各人自身の想像機能を使う練習をいつもすることだ。これは他の人の想像の産物を鑑賞することではない。後者は前者より容易に行われるだろうが、前者は後者から決して生まれてこない。」といっている。決して生まれてこないと断言してよいかどうか、私はまだ不安であるが、彼が云わんとしている事には大いに賛成である。子どもたちの想像機能は、大人のそれにくら

べて現実の抵抗の意識の少ない分だけ自由に展開する。それだからこそ、子どもたち自身の想像機能を、どういう機会や場で、発揮させてやったらよいのか、そこのところで悩んでいる。

この事で一寸したヒントを得たのは、幼児[8]とのクリエィティブドラマチックスの中の次の文であった。

「子どもが真の創造心を発揮することができるように、彼を自由にしてやる指導者が子どもには必要である。……中略……ある五歳になる女の子が、自分のコートが電柱のほうに吹き飛ばされ、それを追っかけていって電柱さんと一緒に食事したと、突拍子もないことをいいながら幼稚園にやってきた。この大変楽しいナンセンスを理解した先生は次の様に理解を示してやった。

〃わたしはあなたと電柱を見かけたわ。何を食べていたの？〃

その子はびっくりして聞いた。

〃先生どこにいたの？〃

〃新しい帽子をかぶったピンクの子猫と一緒に通りを歩いていたのよ〃と先生は冗談をいった。女の子や他の子供達は大笑いした。

そしてその学年が終わるまで、何人かの子が何度も電柱さんについて新しい話を聞かせてくれた」という。

この話の中に出てくる先生の様に「子どもが描いた世界を共感して会話する」というのは子ども自身の想像機能を使う刺戟になり、子どもの想像力を育てるのに意味のある活動のひとつではないかと思うのである。もうひとつ例えてみるなら、

〃ふしぎの国のアリス〃が飛びこんだ生け垣の下のうさぎ穴をぜひ見つけて、子どもと一緒に現代のふしぎの国を生活したいものだと思う。

うさぎ穴の入口、子どもの描く世界へ保育者が入りこむ口はどのように研究したらみつかるだろうか、難しいけれど今後の課題としたい。

（川村短期大学）

(1) 創美（創造美育運動の略）一九五二年、久保貞次郎らによって創造美育協会設立。戦後の民間の美術教育運動のひとつである。

(2) 黒丸正四郎　本文の他に、一九六九「幼児の世界―新生児の状態」日本放送出版協会　一九七九「新生児を見つめよう」幼児開発 No. 107 幼児開発協会

(3) 宮武辰夫（一八九二～一九六〇）著書に次のものがある「アラスカに原始芸術を探る」万里閣　「幼児の絵は生活している」栗山書房　「保育のための美術」恒星閣その他

(4) 川村浩章　一九七九「なぜ美術教育を」美育文化八月号、美育文化協会

(5) ジャンニ・ロダーリ（Gianni Rodari）「ファンタジーの文法」一九七八、窪田富男訳　筑摩書房

(6) A・ラマチャンドラン（A. Ramachandran）一九七八「眼を入れる」絵本の時代・今江祥智編　世界思想社

(7) ブライアン・ウェイ（Brian Way）「ドラマによる表現教育」一九七七　岡田陽・高橋美智訳

(8) ジェラルディン・B・シックス（Geraldine B. Siks）「クリエイティブ・ドラマチックス子どものための創造教育」一九七三　岡田陽、高橋孝一訳

私の保育

水野行恵

私は歩いていて、ぽっと浮かび上がった事を考えるのが好きです。好きというより、それをふくらませて楽しんでいると言った方が適切かもしれません。

幼い頃、お店に飾ってある、まりが欲しくなり、買ってもらおうとぴょんぴょんとびはねて帰りました。もう頭の中には白いゴムまりがすっぽり入っていて、手で弾ませたり、スカートに、「おっかぶせ」をしたりしています。すでにその時、外界とはまったく遮断された状態だったのです。すぽっとどぶに落ちて我に返り、恥ずかしい思いでやっと家に着いたという記憶があります。もし、どぶがなくて、家がもっと遠かったら……なんて考えます。

最近でも、こんなことがありました。道ですれ違ったおばあさん、どこかで会ったような気がするのです。しばらく考えて、思い出しました。小学生の時、何回も夢に出て来たあの恐いおばあさんに似ていました。いつか夢でなくてこの目で、しっかり見たいと思っていただけに、うれしくて胸が痛くなりました。「何でもすぐ良くなる薬をあげるから、こっちへおいで。」と手招きした、不気味なおばあさんが今は、気だてのよさそうなやさしいおばあさんに変わっています。荒(あば)ら屋の格子戸越しに見えた陰うつさが、なぜか明るい陽射しで消されています。何か変だなと思った瞬間、縦看板に当たり、本当にまた、真暗になりました。

この二つは痛い思いで中断されましたが、うれしい中断もあります。幼稚園の先生になって五年目。子ども達が帰ってからの掃除は手際よくなって良いはずなのだが、同じ時間を費してしまう。棚をかたづけながら、今日作った紙粘土のハムスター、へび、おばけなどを一つ一つ見ては一人一人の顔を思い浮かべる。ロッカーからとび出しそうな紙切れを入れ直そうとすると、可愛いい毛虫の親子だったりして、そっと元の様にしまっておく。また、いつも穏やかなSがけんかの助け手として入り、なぜその後泣いたのだろうと考える。そばで全部を見ていたMに、もう少し早く気づけばよかったと反省する。そこで、「お茶にしましょう」と声がかかり、部屋のことは切り上げ、教師六名が集まる。一休みして、子どもの事で、雑談が始まる。この雑談は、出会えなかった子の行動を知ったり一人の子に対する見方の違いに気づき、改めて考える材料にしたりする。この時間もかたづけの時間とは違った意味で大切にしている。

もちろん考えようとして考えることもあるが、このように潜在的に気になっていたことや、興味、関心を強く持っていることは、自然に考えてしまうようである。そして歩いている時とは限らず、思考の転換ができやすいのは動いている時で、回りからの刺激や変化があるとより容易になる。

私のものの見方や考え方は、私の生活となり、その中に繰り返される保育に当然表われる。ここで私なりの子ども観を考えてみたい。

《一個の人間として、その子だけの持つ自然な姿が出せて、生かされていること》子どもがそうあって欲しいということは、逆に私自身がそうならなくては、ということになる。簡単そうにも思えるが、これがなかなか難しい。次に、二人の生活の例をあげ、考えてみたいと思います。

。年少、年長と続けて見ている女児Aは穏やかな子である。入園当初は、挨拶をきちんとし、何でもやってみたいと意気込んでいた。しかし、友達の中でどのように行動していくかとなると、まったく手が出ない。家庭で同年齢の子との接触が少なかったので、友達に少し言われたことが、もう絶対のように受け止められていった。そして友達が大きな存在となり、強い関心を示しながら傍観が続く。印象的だったことは、入園して三日目に、誰も遊んでいないジャングルジムに、一人で天辺まで登り、幼稚園全体をじっくり見ていたことで

す。今いる所は、どんなとこか自分の目で確かめることによって、新しい環境での不安を取り払おうとしていたのかもしれません。絵を描くことと、折り紙製作はするが、砂には手を触れようとしない。Aの兄のことを話題にした時、「知ってるの」というれしそうな表情をしたが、それで終わってしまった。私との関係は平行線だが、幼稚園をいやがらないので、しばらく様子をみようと決めた。相変わらず、友達との関わりはもたない。

六月に入ったある日、こんな気持ちのよい日は散歩したいなと思い、すぐ子ども達を誘う。十人前後でAもなぜか後からついてくる。Aの家は近いので、その方向へ足を弾ませていく。私が「Aちゃん、お友達にAちゃんの家、教えてあげようか」と言うと、一瞬ためらったが、駆けて行って、「ここだよ」と照れながら指さす。少し興奮もしていたようだ。

Aが、友達の中に入ったような気がしたが、それは錯覚で、一人遊びは続く。しかし変化したことは、回りの活動をたえず見ているが、傍観ではなくなったことである。女児Bは、ポスターカラーで一緒に絵を描くうち、親しくなれた気がしたのか、Aに、「お友達になったんだもんね。」と話しかける。「うん」とAは答えているものの、心は全く開いていない。ふらっとその場を離れ、一人になる。私には興味を示した時だけついてくる。図書室で絵本を数人で見て、その後一人が、ダンスをしたいと言いみんなで踊ることになった。後からついてきて、流れに乗ってしまったらしく、初めてフォークダンスを、ほんの少しだけ踊る。すぐやめて囲りを見る。私も目が会ったので、それでいいのよという気持ちで微笑むと、微妙な表情をしたが、ほっとした様であった。スキップをしながらその場を去って行ったので。こんな状態で夏休みに入る。

二学期は入園当初に戻った様に感じた。夏休みは、家庭という環境の中でA自身の生活となり、幼稚園が始まることで緊張する。しかし入園の時とは構え方が全く違う。柔らかなのです。囲りの子の遊び、特に関わり方を一つ一つ体に溶かし込んでいる。「ああ、そうか、そこまではできそうなのだな。」という様に。A自身の活動はというと、ゆっくりと折り紙製作や、家の絵を描き続ける。二学期半ばにAを観察したいという方が週一度見える。見られていると気づくと、Aの方から、「どうしていつも来るの」と話しかけた。以来話すことが楽しくなり、待っていたとばかり、自分の事などを話し始める。私はこの時、気にはかけながらも、いっしょに遊

ぶということをしていなかった。この頃、家だけの絵に、雲や草花が、描き加えられるようになり、友達から誘われると、庭やホールに出てゆく。

Aにとって三学期は、居場所が見つかり、除々にではあるが、自分の活動を見つけてゆく時となった。空いているブランコに乗って、私と目が会うと手を振り、砂遊びをしている友達の後に、そっと座り込んでは、砂を恐る恐るさわろうとする。みんな上手におだんごを作るのを見て、「私、おだんごできないもん」と言う。私は、「いいじゃない、できなくても」とストレートに答えてしまっていた。すると、砂集めを始めるので、私もいっしょにしばらくの間、砂集めをする。どうしてかはわからないが、暖かくなってくる。この時、「何でもやりたいこと、しちゃえばいいんだ」という暗黙の空気が、Aと私の間に流れたような気がした。この頃、家の中に自分が必ずいる絵を描いていた。

年長になると、指人形のおばけが気に入って、家を作り、食べ物を運んで、椅子の上で新しい遊びを始める。おもしろそうと仲間が集まり、増えてゆく。楽しそうに話しながら、時々赤ちゃん言葉にもなったりしている。六月の中頃、初めて、家のドアを開き、女の子が外に出てきた絵を描く。

この時、津守先生の、〝保育の体験と思索〟を思い出し、驚いてしまう。今、Aは、自分から心の窓に開き、自分の姿を見い出そうとしているのではないかと考えたからである。まだ本当ではないかもしれない。自然ではないかもしれないが、精一杯歩んできたAに感動する。逆に、私はAに何をしてきたかを考えると、ずっと見守っていたとしか言えない。気にはかけていたが、私の心と体が、Aだけに、どれだけ向けられていたか、そして、その時、私の心と体は柔軟で、すっと入り込める状態であったかを考える。頭の中にあるだけで、直面していなかったと反省する。子どものコンディションのことを私はよく言ってきたが、大人である私にも言えることだとこの時気づく。

二学期から、徐々にAに対して、見方を決め始めていた。何度か、誘ったり、近づこうとしたが、Aは、他からの刺激は、溶かしていくものの、前には出ず、後ろに退く行動をとると感じたのです。その時から、〝待ってみよう〟と、姿勢を変えた。ただ漠然と待つのではなく、毎日の変化に気をつけながら……。待つことの心細さ、不安が、時々、私を、「何かしなさい」と声かけたが、Aを信じて待った。今、次の段階にきていると思う。

Aにとっての発達（自分を出していくという点で）は本当に、なだらかな坂を一歩一歩登って来たように思う。

。六月に入って登園拒否をおこした、年少女児Bは、Aとは対象的に感情を表現する。何でも、「イヤダ」と言って、一日中泣く。しかし手を握られ、私といられれば安定し、次の日は得意気に鉄棒の前回りをする。数日し、また泣きながら登園。「お母さん、病気だから、看病しなくちゃ」と必死に帰ろうと抵抗する。そばにいると落ち着き、甘えてくる。また、にこにこと気持ち良く、遊ぶ日が続いたかと思うと、「誰も私と遊んでくれない」と言う。絵を描くのが好きなので誘うと、塗って楽しむ。今度は、ポスターカラーの容器を洗うと言い、自分の気持ちまで洗っている様であった。私がお礼を言うと、誉めてもらいたくて、毎日でも容器洗いをする。やはり、何かを洗浄しているように見うけた。自分が役に立った、認めてもらったということで、満足したようだった。

二学期も時々、泣いたりしたが、甘えも出してくる。「くつ置く所わからない」とか、どうもなっていないのに、「ここ痛い」と言ったりした。一つ一つていねいにみてあげ、いっしょに砂遊びをすると、Aとは比べものにならないほど、ままごとが大きく広がる。

三学期に入ると前（Aに話しかける）以上に友達との接触を求める。しかし、直接的で長続きしない。砂遊びをする時は、どんな友達とも自然に話し、じっくり遊び込み、私の存在を忘れる。Bは毎日、どんな心の変化の中で、生活しているのであろう。そして、そうさせるものは何だろうと考えてみた。家庭生活も関係ありそうだが、（Aと同様に）どれだけ、私の心と体が、Bにだけ向けられ、触れ合うことができたかと、疑問を、自分に投げかけてみる。実際は、目の前で言うBの要求に答えているだけで、見えない真実の要求は、感じ取ることができなかったと反省する。そして年長となった。

Bにとっての発達（自分を出していくという点で）は、螺旋状に回転しながら、やはりなだらかな坂を登って来ていると思う。

女児A・Bを発達の違いを通して、私なりに考え、最初の問いに答えてみたいと思う。

Aは、幼稚園での一つ一つのでき事を、自分の目で見、耳で聞き、肌で感じて、自分のものとし、納得しながら、体に蓄えていった。これは真実なるもので、Aだけにしかない、〝個性〟というものが、生み出されていくと思う。そして率直に自分が出せれば、自然に生かされてゆく道も見つけられる。

一方Bは、一つ一つを精一杯にぶつかってゆくのだが、早く完成させてしまおうとするがために、大切な所を、さっと通り抜け、不安な思いをたえず、することになる。しかしその不安を解決するために、安定の場所を求めて思考錯誤をし、また本当の自分を、取り戻すために出直さねばならない。何度も何度もくり返すうちに、真実が見えてきてBだけにしかないものが得られる。

ここで大切な所とはいったい、どんな所か、それは、子どもにはよく見える真実という所で、そこは、暗かったり、恐かったり、小さかったりするような気がする。(私の子どもの時を、振り返ってみて)

子どもは、真剣に生きるからこそ、黙ったり、泣いたり、驚いたり、喜んだりする。私は、その真剣さに、どう向かい会ってきたかと改めて考えざるを得ない。投げかけられたものを、ありのままに受け入れ、時を逃さずぴったりするものを返すことができただろうか。また、同時に、共感することができただろうか。時には、直観で反応し、時には、予測して答えていたように思う。これらは、保育者自身の体調も大きく影響するので、日常生活の中で、整えておくように心がけなければならない。

毎日の保育の中で、素通りしてしまいがちな私に、歩みを止めて考えさせ、文章化するという機会が与えられました。このことによって、私の物の見方、考え方が、少し整理され、深められたことをうれしく思います。

また、幼児に関することが、大人の世界で忘れかけていることを改めて気づくことができました。(新鮮な目で見て、率直に感動したり、疑問を持ったりすること)

これらは人として、大切なことであり、成長していくはずのものが、逆に鈍くなってきているというのは、悲しいことです。

私らしく生きるために、諸器官を、働かせ、何かあふれるものを持ちたいと思います。つまり、それが生かせるものになると信じるからです。

(埼玉・浦和母の会幼稚園)

日々新

堀合文子

又、暮がやってきました。そして新年を。このくり返しは世の中の、社会の、宇宙の、くり返しで大きなリズムをきざみながら、進んでおり、人間はその中に生活し、生きているのですね。くり返す事の大切さ、くり返す事によって人間は進歩もしますが、後退する場合もあります。そしてそれはマンネリ化を招いてしまうのでしょう。

幼児教育の現場もしかりで、時々自分を反省してしまいます。

幼児はあらた

現場にいられる先生方だったら誰もが感じられる事でしょう。二年或いは三年幼児を世話して卒業させ、又新入園児を迎える。その時、二年、三年前にこのようにしたから今頃はこのように、又今はこの事をと、考えるのは誰でもする事で、それは経験が少ないと少いだけに自分の経験に頼り、むしろそこへ自分の安定感を置いてしまい、経験を生かす意味でも何の不思議もなく、相手の幼児の状態も考えずくり返してしまいます。又、経験の多いものはそれ以上の安定感を経験の上に置き、むしろ腕が上った位の自負を持ちながらくり返してしまい、むしろマンネリ化の方向へ。

ところが幼児は、一年前でも、その一年間の間の社会状勢の影響は今の時代大変な事で、人間を年々に変化させています。

敏感な子、口先ばかりで行動のともなわない子、情緒の不安定な子、言語の乏しい子、足の弱い子、空間の使い方を知らない子、自制のできない子、大人を小さくしたような子などなど。これらが強く出たり、人によっては事柄により弱く

でたりと様々ですが、びっくりする様な事をよいも悪しきも持っています。一見数年前よりも、まあおとなしいとか、手がかからない等のように見え、腰かけましょう、並びましょうと言えばやってくれる子どもたちは増えたようで、〃今年の子どもは手がかからないわ〃と、四月喜んでいては大へん。そして、喜びながら平気で次の段階へと考えたら尚大へん。この事はよくある事でしょうが、幼児が常に人間として生まれて幼稚園や保育園へ来るまでに、年毎に違った社会状勢の中に生活して来ているので同じ幼児教育方法では勿論子どもをだめにしてしまうし、幼児の本当の力を育てる事はできないのではないでしょうか。

又、自分の経験上の考えか、信念か、自信か知りませんが、それにあわない子どもはみな問題を持つ幼児になってしまい、すばらしい能力も問題視のために育てるどころか知らないうちにつぶしてしまいます。勿論私ども現場のものは〃時代が違ったから子どもたちも変って来た〃とは誰しも気がつく事で頭では理解している事なのです。

しかし、新卒は新卒なりに学生時代長期で修得した学問を尺度として子どもを測ってしまい、経験をつめばその経験で測ってしまいがちで、何れにしてもくり返しのおそろしさにもなるのでしょう。

幼児は、人間として常に成長しています。周囲よりもいろいろと吸収しながら育っている事はいうまでもありません。その人間の力は明治時代も、大正時代も、昭和時代も違わないでしょうが、いろいろの環境の影響により私どもの目の前にあらわれた幼児は大きな変化をしています。

その変化には明治、大正時代より、よき悪しき点として、いろいろな形として所有している事は言うまでもないので、それを明治時代に、大正時代に、すぎた昭和の時代の子どもにもどす必要はない事も又言うまでもありません。むしろ、私共が前進させなければ、前進してもらう力を育てなければならないのではないでしょうか。

誰しも意識して古い事をしようとは思いませんが、先生の〃子どもを見る目〃の違いが、そこに時代的、いや、時間的古さを表現してしまうのでしょう。現代に成長を重ねている幼児を後へもどすような幼児教育は互に注意したい大きな事の一つで、先生も常に前進し、新しい力をそなえてないといけないのでしょう。幼児の見方はむずかしいものです。ああでもない、こうでもないと、考えるのですが、先生自身の頭が動かない、働かないのでは困る事で、先生自身頭の回転を

常に新しく働かせる事が大事になるのでしょう。

そもそも、〃子どもを見る目〃ができてないといけないので、文部省からも〃子どもを見る目〃との映画まで作られたように大切ですが、その見る目が個人差があるので、自分では正しくみているつもり、又は正しいと思わなくても或根拠はあります。が、やっぱり本当によく子どもをみたいですね、それは、単に〃子どもをみる〃、文で書くとこれのくり返しですがそれはむずかしい事で先生によっても見方が違うのです。その点も私共現場のものは常に新しい考えで、常に新しく新鮮な目でみる必要があるのでしょう。自分の尺度に子どもをあわせてしまう事だけはしたくないと思います。

子どもの生活を外側から見ていては本当に子どもは見えないものです。子どもの生活にどっぷりと入りこまなければ見えないのです。子どもの生活に入りこむ事はとてもむずかしい事で、子どもになれ、子どもと同等の位置に自分をおく、など言葉では言ってみますがむずかしく、先づは、自分を忘れる事です、夢中になる事です。無我になる事です。常に先生の立場に自分を置くのでなく、この無になる事で子どもの生活にとびこみ、子どもと共に生活して、子どもと同等になる時、本当に子どもの姿、考え、行動が理解でき、本当の子どもの言葉が聞えてくるのです。自分を意識し、無にならなければ子どもの世界に入ってない、先生と子どもの間に巾のある生活でしょう。

見えて、聞えてくれば、それに対する対処の仕方は正しい指導となって子どもたちを育てる糧となります。子どもたちはその時始めて先生と共鳴して考える事は考え、吸収するものは吸収して育っていってくれるのだと思います。

しかし、そこに難かしい事は、常にとっぷり幼児の世界にひたりすぎていると、その場面はよくても、他の場面の幼児も多くいますので、そこには外側からでも見なくてはならない場がある事です。いくら無になる事が大切だからといっても生活の中にいながらも、先生は自分の行動や気持などその場に応じて変えてゆかなければならない事が日常にはたくさんありますので、これを機会を捉えたり、機会、場面に応じて先生自身を使いわけてゆく事が大切で、これが保育技術の一つではないでしょうか。先生が生活の中に入りこめないと、又、子どもたちを尊重してやっている、充分にあそばせているといっても知らない中に先生中心になっている場合が一ぱいあるのです。そしてこれは経験を重ねたから、経験を重ねないからの問題ではないと思います。

やはり〝あそび〟は幼児に大切

子どもたちは生まれながらにして、いろいろの能力を持っている事は改めて言うまでもない事です。前述のように、その力を発揮した時にいろいろな社会状勢、環境のために、影響を受けている事は申しました。やはり、持って生まれた個々の大切な力を引出してあげ、引出すだけでなく、引出した力を育てなければなりません。その時に、自分からいろいろと考え、工夫し、その場を判断して行動のできる子どもに、自分の持っている能力を使って生活できる子どもにしたいものです。いくら時代が、時代が、と言っても、この事は人間として大切な事で、あの子どもたちが社会の一員に成長した時に大切で、これらの力を充分に活用して生活できる人になってほしいものです。

このように考えてまいりましても、帰する所は、幼児の生活である〝あそび〟を充分にさせ、その中で個々を育てる事にもどってしまいますが、時代がかわろうが、環境が変化しようが、この事は幼児と離せない大きな事実であり、大きな教育であります。このくり返しは大きく大きく原点となり幼児期を大きくささえていてくれます。

私共現場の人員はこの大きな原点をふまえて、常に先生の頭を、体を、神経をきめ細やかに働かせて、常に新しく、常に前進した考えを持ちながら生活してゆかなければならない事と思います。それには先生としての自分の勉強をすべての事を最高にきわめてこそ、例えば、心理学、教育学、哲学、医学、理学、音楽、の学問をはじめとして、技術もピアノのその他楽器など、ダンスも、歌も絵も、制作もすべて最高に修得する事が必要で、それでいてこれをいかに使うかは先生の頭を働かせて実践する事で、最高の学問、技術を先に出したら大へんな事で、そのところが又大きく保育技術となる事でしょう。

× × × ×

暮の声を聞き年のくり返しと共にこんな事を自分に言いきかせていました。日々が新しく、日々に前進しなければ子どもたちと生活するわけにはいかないでしょう。暮の十二月、一年の振返りと共に、次の年の希望を大きく大きく持って一時、一時前進する事が幼児教育の現場の大きな原動力となり幼児の中に流れてゆく力となってくれるのではないでしょうか。除夜の鐘の音と共に前進です。自分の前進です。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ダンスの変遷史（二）

輿水はる海

五、大正デモクラシーとダンス

第一次世界大戦前後には、世界各国に民主主義が波及し、教育界にも影響を与え、我国でも新教育運動がおこった。成蹊実務学校、成城小学校、千葉師範付属小学校、奈良女子高等師範学校付属小学校などで、自発的思考や活動、創造性を尊重した実践的研究が活発に行なわれた。

体育の中でも、体操中化の姿勢に変わりはなかったが、スポーツや遊戯にこれらの点が強調され、特にダンスは、音楽や絵画とともに新分野を開拓した。

(1) 童謡運動と童謡遊戯

音楽教育の場では、小松耕輔、梁田貞、葛原しげるらによる「大正幼年唱歌」（大正四年～七年、全十二集）が刊行され、これを契機として唱歌と児童音楽の革新的機運が高まり、童謡運動がおこった。鈴木三重吉を中心に「赤い鳥」（大正七年創刊）が出版され、北原白秋、小川未明、島崎藤村らが協力して、新教育の求める表現性、創造性、個性を育てる教育を推進しようとした。この「赤い鳥」に多くの童謡が発表され、日本の子どもの生活感情と密着しているこれらの童謡に踊りをつけた童謡遊戯が、数多く生まれた。

(2) 唱歌遊戯・行進遊戯の発展

土山五郎、高橋キャウ、三浦ヒロ、戸倉ハルらによって、唱歌遊戯、行進遊戯の研究が大いに進み、講習会が広く行なわれた。多くの書物が出版され、加藤正雄、岡本きいち、初山滋、鳩谷昇らの絵がこれを彩った。書名としては、「唱歌遊戯」「行進遊戯」「表情遊戯」「表現舞踊」「律動遊戯」「童謡舞踊」「体育ダンス」「学校舞踊」「説話遊戯」「音楽遊戯」などがあった。著者は、土川五郎、水谷しきを、砂本靖二、荒木直範、白井規矩郎、赤間雅彦、渋井二夫、小瀬峰洋、小西美良、戸倉ハル、高橋キャウ、印牧季雄、三浦ヒロ、下間芳克、高橋堯、美濃部ゆたか、升之一人、石井小浪、長田博、島田豊らであった。

土川五郎は麹町小学校長として律動遊戯、律動的表情遊戯の研究を進めた。表情遊戯は、①表情は感じという事に重きを置くべきこと。②歌に付してある音楽と表現形式との調和を考えねばならぬこと。として、当時の幼稚園の表情遊戯を「歌詞にとらわれて、その歌詞の通りに舟を作ったり山をこしらえたりして、何でも一つ余す所なく表わそうとして、感じということが少しも顧慮されていない。」と批判している。

律動遊戯は、音楽の気分、リズムによって、児童を基とした動くもので、歌詞によらないものであり、生理と心理の上に一致して、而も、美学上にも十分に注意を払ったものであるとしている。

この様に表情遊戯、律動遊戯を定義づけ、「表現は児童を中心として世界共通の上に国民性の表れを織込んだものである」と結んでいる。

童謡遊戯と唱歌遊戯の関係について、戸倉ハルは、

「……『唱歌遊戯』といたしましたが、世間でいう『童謡遊戯』もこの中に含まれています」と童謡遊戯を位置づけている。一方、土川五郎は、これを表情遊戯と呼んでいる。

特にここで取りあげたいのは「自由表現」についてである。「系統的保育案の実際」(昭和十五年)によれば、年少組の初期より唱歌遊戯の中に自由表現が組み込まれており、それ以外にも、自由表現させる方向をとっているものがかなりある。これは幼児の個の開発をめざして行われたもので、「誘導保育」等とも深い係りを持つものであろう。二、三の例を挙げると、

●ひよこ (福井直秋曲、戸倉ハル振)

準備　円形を作り、内方を向き、手をつないで円の内を籠の中とする。円の中に数人がひよこになって入る。ひよこは各々自由にひよこの表現をする。そして、適宜周囲の者と交代する。(名自

が自分で指名して交代する)

一、ヒヨヒヨヒヨヒヨコ　カハイイヒヨコ

二、ピヨピヨヒヨヒヨコ　ナイテハアソブ

三、ヒヨヒヨヒヨヒヨコ　カワイイヒヨコ

●鳩ポッポ　自由表現　曲は適当なのを選ぶ

「みんな可愛い鳩ポッポになりましょう。」と先生も一緒になって、みんなに鳩ポッポの様子をさせる。

「さあさあ豆を撒きますよ。ほーら食べにいらっしゃい。沢山召し上れ。」

「もう日が暮れますから、早くおうちに帰りましょう。」

と先生が招く方へ。急いで羽をひろげて飛んで行く。

「夜になりました。みんなおねんねしましょう。」

と云ふ様にして導びくと、子供たちは本当の鳩ポッポになり切って、めいめいが可愛い表現をする。

●飛行機

お互にプロペラー（両手）がふれ合うと飛行機が墜落することを話し、墜落しない様に上手に舵をとる様にすると一層面白い。手のふれた者は円の中央に出て来て、座って拍手していること。

これらは土川五郎の「遊戯は行う者が楽しくて止められないものでなくてはならない」の精神を貫いたもので、ダンス教育の場での大きな前進であり、第二次世界大戦後の新教育の基礎になっているものである。しかも、幼児や小学校低学年において最も研究が進んだ事と、実践的研究である事の価値は大だ。

(3) 改正学校体操教授要目にみる唱歌遊戯・行進遊戯

大正十五年五月二十七日、改正学校体操教授要目が公布された。

唱歌遊戯の目的を生徒・児童の自然の活動性に適応して、唱歌に伴う表現的動作に依り、全身の発育と健康とを助長し、快活な精神を養うこととしている。行進遊戯の目的を、①調律的な各種の優美な行進に慣れさせ、且各種の隊形に於ける団体的行動に習熟せしめつつ、全身の健康を増進し、同時に快活・規律及び協同を養うことと、②調律的で円滑・軽快な全身動作によって、快活・温雅な精神と端正・優美な容姿とを養い、以て心身の円滑な調和的発達をはかり、身体を強健ならしめるものであるとしている。

歩行練習が新に加えられ、①各種の歩行・動作の組み合せの練習。②音楽をきいて、感じたままを歩行動作に表現。の二方法が示されている。自立性を尊重し、自発的に行わせるよう、また技術の末に拘泥してその活動を制限しないよう心がけると示されて

いる。

六、外国のダンス・体操界の動き

デルサルト(François Delsarte, 1811～1871)はフランスの声楽及演劇の教師であった。デルサルト体操は内的な感情と外的な動作とを関係づけようとしたもので、優美な落着きと解緊を特徴としていた。米国で注目され、特に一八九〇年代女子のカレッジで関心を集めた。我国では、フェリス女学校、日本女子大学校で明治期から採用された。

ギルバート(Melvin Ballou Gilbert, 1847～1910)は、エセティックダンスをハーバードの夏期講習会や、ボストン体操師範学校で指導した。これは、内的感情の表現と、均斉のとれた身体の修練を目的としている。ギルバートの教えを受けた井口阿くりは、「ファウスト」「ポルカセリーズ」の二作品を我国に伝えた。このダンスは、明治・大正・昭和へと踊り継がれた。

ダンカン(Isadora Dancan, 1878～1927)はアメリカ生まれのオランダ人である。古典バレーの技巧的な世界を嫌って、靴を脱ぎ素足となって、ギリシア実衣の様なうすものを着けて踊った。自然主義に徹し、主として古代ギリシアの絵画や彫刻の中に、自然な動きの形式を求めた。踊りは印象主義的であり、即興的であった。ベルリンにおいて初めて認められて以来、ヨーロッパの主要都市を巡って人々を酔わせた。「新舞踊の母」と言われ、その後の舞踊運動に影響を与えている。

パヴロヴァ(Anna Pavlova, 1822～1931)はロシアのペテルスブルグに生まれた。古典バレー最後の人と言われている彼女は、洗練された技巧で古典芸術の精髄を踊った。大正十一年に来日し、「瀕死の白鳥」「蜻蛉」等の踊りで日本人のバレエの関心を高めた。

ダルクローズ(Jaques Dalcroze, 1865～1950)はウィーンに生まれたスイス人で、耳のみに頼ろうとする音楽教育法は、極めて不完全であると考え、音楽を聞いて直ちに肉体的に反応する様な練習法を工夫し、リトミックを創案した。彼の理論と方法は、時代の要求に合致して、音楽及び舞踊教育の上に大きな影響を与えた。岩村和雄、小林宗作らが彼に学び、現在に至るまで影響が続いている。

ボーデ(Rudolf Bode, 1881～1970)はダルクローズの弟子であり音楽家であった。表現体操の創始者であり、運動法則によって緊張解緊、運動と振動の全体性について、一つの運動体系にまとめた。昭和初期の緊張・解緊の運動の導入など、我国の体操・

ダンス界には、ボーデへの志向が見られる。

ラバン（Rudolf von Laban, 1879～1958）はモダン・ダンスの人で、舞踊を理論的に且系統だてた。第二次世界大戦中ナチスに追われ、イギリスにおいて、教育舞踊のシステムを確立した。舞踊記録法としての舞踊譜も、彼の功績の一つである。

ウィグマン（Mary Wigman, 1886～1973）は、ダルクローズやヴィゼンタールの舞踊に魅せられて舞踊界に入った。ラバンの学校に学び強い影響を受けた。無音楽舞踊「巫女の踊」をはじめ、「トーテンマル」ほか、内的経験とその強烈な表現が、米国のモダン・ダンスに影響を与えた。

以上の外国のダンス・体操界の動きは、他国で学んで帰国した伊沢エイ、高橋キヤウ、三浦ヒロらによって、我国の教育の場にも及び、文献による研究も進んだ。

大谷武一は、「新しい体操への道」の中で、諸外国の動向を示し、「女子体育の方法としては、表現体操と舞踊とが最も適合している。」と述べていることは注目に値する。

同じ頃、石井漠、小森敏、高田雅夫らの専門舞踊家が輩出し、新舞踊熱が高まった。

七、学校体操教授要目

昭和十一年六月に公布された学校体操教授要目は、従前に比して形式内容共に、最も充実したものであり、唱歌遊戯・行進遊戯には、新たに基本歩行・基本態勢・応用態勢を示した。

指導上の注意によると、①基本練習を重視することにより、運動並に技術的効果を狙う。②模倣注入を避け、生徒、児童の自発活動を重んずる。とし、従来の唱歌遊戯・行進遊戯が模倣注入主義であったことを指適し、開発的な指導例を掲げている。

八、戦時下のダンス

第二次世界大戦中のダンスは、名称を音楽遊戯に統一し、体錬的効果を目標にしている。低学年では、自然的な遊戯として一連のものを掲げ、高学年では、基本歩法、基本姿勢のみに止めている。

基本歩法の名称も、従来のランニングステップは足尖歩、ワルツは三拍子等となり、「ヒノマル」「機械」などの題材が挙げられている。

吉田清教授は、「従来のスポーツはその影をひそめ、ダンス形態の運動は、女子といえども一切禁止の憂き目に会うような状態になった。この中に在って、戸倉女史は、ただ独り、学校ダンス存続に奮闘、必死の力で漸く、その余喘を保つだけに支えたことは、想い出深いことである」と回想している。

九、ダンスの新時代

第二次世界大戦終結と同時に、ダンスの方向は大きく揺れ動いた。明治以来、教師中心で、既成の作品を習熟することに主眼を置いていたものが、創造性を開発することを目的とした、創作ダンスへと転換した。昭和二十二年の学校体育指導要綱以来、創作ダンスは既に三十年を経ている。戦後のダンスは、徐々に着実に、自らの魂を表現するものとして育っている。

むすび

明治初期の豊田芙雄らの熱意、大正期から昭和初期にかけての自由表現のための研究、そして現在の創作的取扱いと個の開発。倉橋惣三は、「各の幼稚園は環境を異にし、形態を異にしている。如何なる保育案と雖も、いづれもの幼稚園にそのまま適用せうるべきことはあり得ない。」と言う。個の創造性開発の為に、更に飛躍する事ができるであろう対象の診断を繰り返しながら、指導を行なう事と、底辺拡大を狙った「やさしい指導法」を研究開発する事が望まれる。

（了）

（お茶の水女子大学）

参考資料

1 高橋キャウ「唱歌遊戯」右文館　昭和2
2 戸倉ハル「唱歌遊戯」目黒書店　昭和2
3 高橋キャウ「行進遊戯」右文館　昭和4
4 大谷武一「新しい体操への道」目黒書店　昭和5
5 三浦ヒロ「行進遊戯材料とその指導法」目黒書店　昭和7
6 体操研究所「学校体操解説」右文館　昭和8
7 土川五郎「大正幼年唱歌　表情遊戯　上巻」目黒書店　昭和9
8 女子体育振興会「小学校体操科解説、尋常科第一・二学年用」昭和12
9 石井漠「世界舞踊芸術史」玉川学園出版部　昭和18
10 園部三郎「音楽五十年」時事通信社　昭和25
11 園部三郎・山住正己「日本の子どもの歌」岩波書店　1962
12 ヴァン・ダーレン他、加藤橘夫訳「体育の世界史」ベースボールマガジン社　昭和39
13 日本体育学会「日本体育学会第27回大会号」p.81　1976

☆世界の子どもたち☆

保育者からリタラシーワーカーへ

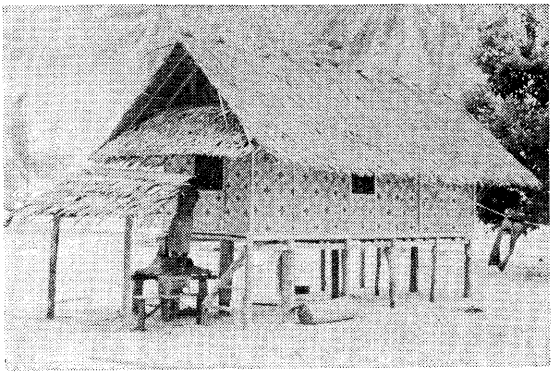
永井康子

S・I・L

世界中にいまなお散在する文字を持たない人々の言葉を文字化し、彼らの民話等を書きとどめ、また聖書の翻訳に努めている、ウィクリフ聖書翻訳協会（Wycliffe Bible Translaters）という組織があります。少数部族の言葉を保存しなくても、英語（又は他の共通語）で良いではないかという意見もあります。しかし、母国語はとても大切なものです。

私はオーストラリアに来てから六年、今では英語に不自由しませんが、三浦綾子さんの『塩狩峠』を英語で読んだ時には、何となくまわりくどいと思いました。日本人の私には、やはり日本語の方がすんなりと受け取れました。これは、どの人にとっても同じではないでしょうか。彼らの風俗習慣は、彼らの言葉でこそはっきりと言い表わし、理解できるのです。

ウィクリフ聖書翻訳協会のメンバーになり読み書き（リタラシー・ワーカー）を教える先生として働くためには、その姉妹機関でもあるＳＩＬ（Summer Institute of Linguistics）で、未知の言葉を分析するための技術――音声学・文法等と、その言葉の読み書きを教えるための技術・教科書の作成方法等について、綿密に学んでおく必要があります。それから、最も大切なこと、人々をよく理解することを



◀ ワンゴール村の住居

学びます。そのために、原地実習 field training（通称ジャングル・キャンプ）が、パプア・ニューギニアで行なわれます。私はこのジャングル・キャンプに、一九七八年三月から七月まで参加しました。

パプア・ニューギニアにはピジョン英語（英語・スペイン語等を混ぜ合わせて作られた独特の言葉）という共通語がありますが、一九七五年に独立した時に、英語を国語と制定しました。けれどもこの国には現在約七百もの言語が存在し、すでに約二百の言葉が文字になり、聖書が翻訳されています。

パプア・ニューギニアの北岸の都市マダーンから約20kmの山の上、ノボノブというところに、ジャングル・キャンプの本部があります。将来のへき地生活に備え、食料保存、看護衛生、水泳、山岳訓練の実習をし、それからさらに二か月、現地の村で初めての外国人として生活することになるのです。フィンランド出身のピルッコ・ルオマさんと私は、ワンゴールという村に派遣されました。

ワンゴール村での生活

ワンゴール村というところ

マダーン市から海岸沿いに約160km北へ行ったところに、ワンゴール村があります。ここには電気も電話もありません。薪とランプの暮らしです。人口約八十人の小さなこの村の北東には真青な南太平洋が広がり、すぐ目の前にも活火山マナム島が浮かんでいます。南西は一面、緑の椰子（ココナツ）の林です。二週間毎に、村全体が協力してこの椰子園で働きます。私たちのような時間的観念がなく、皆のんびりと暮らしています。

彼らの家は、暑さを避けるために床は地面から1～2m高くなっており、窓もあっ

て風通しよく造られています。お勝手のある家もありますが、多くの家族は砂の上に空缶を三つ並べてなべをのせ、下に火をおこして雑煮をつくります。屋根は草ぶきですが、壁は、竹に似た木を長く裂いて編んであります。いろいろな編み方があり、各家の壁の模様が違うので、とても美しいと思いました。

交通機関

ワンゴール村から一番近いボギアの町までは、車で四十分位かかります。徒歩か、PMV (Public Motor Vehicle) と呼ばれるトラックの荷台に乗って行くかのどちらかです。荷台はほこりっぽく、ガタガタ道を行くのでとても揺れます。誰もが皆私たちに対してとても親切で、よく助手席に乗せてくれました。PMVは決められた時間に走るわけではないので、利用しようとする時には何時間も道端に座って待つ覚悟が必要でしたが、私たちが手を振ると、どんな車でも必ず止まってくれました。これは現地の人々には通用せず、ピルッコさんと私だけの特権でした。

村での生活

村での私たちの仕事は、ワンゴールと他の四村間の方言及び生活状態の違いを調査することと、現地の人々と良い関係を結ぶことでした。村の人々と私たちの共通語＝ピジョン英語を使いながら、ワンゴール村の言葉マヤ語を少しづつ習いました。また、村の近くには小学校がありませんでしたので、七～九歳位の女の子五、六人に、読み書きを少し教えました。

村の人々は、村で一番新しい家＝村はずれにあるハウス・ボーイという家を貸してくれました。床は隙間だらけなので、掃く時とても便利です。ほうきは、ココナツの葉からつくります。またこの家の床下の砂地はたいへん涼しいので、水をはったバケツは、冷蔵庫の代りになります。といっても残り物用で、肉や野菜は乾燥させて保存しました。

何しろ私たちのすることは何でも珍らしいものですから、いつも誰かが見に来ています。雑煮しか知らない彼らが土のかまどをつくる手伝いをしてくれた時の顔……そのかまどでパンを焼くたびに、村中の人たちが集まってきます。そして毎日交代で、さといもの雑煮を届けてくれるのです。料理したものをくれるというのは、〝親しい間柄〟の印なのです。それで私たちは、焼きたてのパンやケーキをあげました。ワン・トーク・システム(いわゆる物々交換)の暮しをしたのです。

村で使う水は、山からパイプで引かれています。パイプが一本通っていて、絶えず水がザアザア出ています。ここでシャワーも浴びられるので近くて便利でしたが、一

か月もの間パイプのどこかが詰まってしまった時には、水を求めて上流にまで行かねばなりませんでした。

ワンゴールの人々の髪の毛は黒くてちぢれているので私の長く真直ぐな髪はとても珍しく、私が髪を洗うごとに見に来ました。子供たちは、とかした時にぬけた私の髪の毛を大切にしまっておくことにしました！

男女の役割

パプア・ニューギニアの女性の役割は、西欧諸国よりも日本に似ていると思います。オーストラリアでは男性が荷物を持ってくれます。ところがこが国では、重い荷物を背負って行くのは女性の仕事です。女の子供たちは、小さい頃からビールムという網の袋を頭から背にかける訓練をされるので、首の筋肉が強くなるのです。

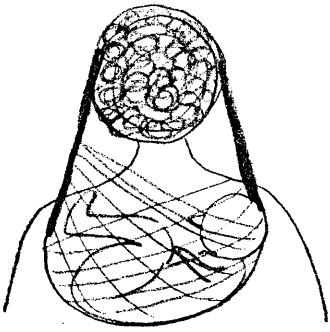
畑を耕すのは男性の仕事ですが、その後、さつまいもやさといもを植え、収穫するのは女性の仕事です。浜辺で薪を拾うのも、薪を割るのも女性の役目。料理も女性の仕事ですが、男性も料理に興味を持っているということを発見しました。

男の子は、十三～十四歳になるとカヌーの漕ぎ方を習います。槍を持ってダイビングをし、海の幸を持って帰るのが仕事です。また、山へ猪狩りに行くこともあります。

村の子供たち

子供たちは、三歳頃まで母乳で育ちます。母親はビールム（網の袋）に小さな子供を入れて運びます。日本のおんぶと似ていますが、ビールムの中で子供は母親の背に対して横向きになる点が違います。

子供たちは小さな妹や弟の面倒を見たり、母親の手伝いを一生懸命にします。追いかけっこ以外のゲームをして遊ぶ場面は一度も見かけませんでしたが、浜辺で砂を掘ってカニやグムングと呼ばれるカニによく似た軟体動物をつかまえては、食べていることがありました。ピルッコさんと私も、よく仲間に入れてもらいました。彼らにはあそびのための畑があり、母親の真似をして働くこともできます。また、浜辺に掘立て小屋を建て、小さな魚やカニを採り、火をおこして実際の生活を子供たちだけで楽しんでいるのです。何と素晴らしい経験でしょう!!



▲ ビールム

◀ 村の子供たちと

両親と子供は普通、一軒の家で生活しています。ところで、どの村にもたいてい、ハウス・ボーイという家があります。十代の男の子供たちが共に寝泊まりするための家です。彼らの両親は同じ村に住んでいることも、近くの村に居る場合もあります。ハウス・ボーイに集まった男の子たちは共に漁に行き、とれた海の幸は家族や親戚に分けてあげています。大漁の時には、私たちにも大きな伊勢エビ等をくれました。

戦争の跡

近くの椰子の木には、鉄砲の穴がたくさん空いていますし、村人たちは、日本兵のことをよく覚えています。その兵隊さんの国の女の子がいったい何をしに来たのだろうと、さぞ不思議に思ったことでしょう。

ある日私たちは、男の子たちの案内で、日本兵が印をつけたという木を見に行きました。村はずれの大きな川のそばに、その木がありました。木の皮を剝いで、二列に「太田、本橋」と彫ってありました。この二人の兵隊さんは、ずっと以前に亡くなったということです。戦争で日本が残した傷は、いったいどのようなものだったのでしょう……

現地の人々の中に入って共に生活し、言葉を学んで実際に使っていくことは、彼らを理解するために大切なことです。二か月一緒に暮した私たちがワンゴール村に別れを告げる時には、村人全員が集まって、涙を流して見送ってくれました。素晴しい経験でした。

さて、私は、SILの全ての課程を終了し、この九月から、ウィクリフ聖書翻訳協会のメンバーとして、オーストラリアのダーウィンにある原住民(アボリジニー)支部に来ました。ワンゴール村での生活から得たことを生かして、原住民(アボリジニー)の中に入って、読み書(リタラシー・ワーカー)きを教える先生の仕事を始めるわけです。

遊びと子どもの発達②

〈悪口うたの遊び〉

加古里子

生をこの世にうけた子は、まわりの人々の語りかけや話しぶりに対応し、声や音をききわけ、それにこたえてちいさな叫び声を発する。アーとかウックンという言葉にもならぬその小さな声がやがてかわいい声の連なりとなり、学者はそのモニョモニョ言葉を喃語と呼ぶ。

その中に明らかにママとかウマウマという単語が、意味概念をともない、意志指向を持ってあらわれる時、その子が言葉を得たという事となり、その母国語は使うよろこびと答えがえられるうれしさによって、人間同士の意志疎通の重要な手段として、加速度的に語いがふえてゆく。

もし子どもに言葉をかけたり、顔を見せて語る事をせず、言葉というものの楽しさと共通の喜びを抱かせないと、子どもは言葉を覚え使い反応をたしかめるという積極さを失い、言葉おくれや寡黙な子となるおそれを秘めるに至る。TVの影響を重視する向もあるが、そうした子の周囲の言葉を交す事が不充分であるという培地がある所に、更に所謂「テレビ子守」をさせる為、自らが

声を発し意志表明とその確認を求める積極さを失うのは当然という事がいえよう。

通常、子ども言葉の数は、次のようにふえてゆく。1)

一歳2、3語　二歳　200～300語　三歳850～900

四歳1500～1700　五歳1900～2000　六歳2300～2600

こうして子どもが次々と言葉を覚え、それを使う間、子どもは妙な言葉に気がつく。それは相手が大人だったり、同年位の子であったりするが、いままでとはちがう雰囲気や顔付きで「バカ！」とか「オッタンチン」という言葉をあびせかけられた時である。その原因は何かいたずらをした時だったり、砂場でシャベルをとろうと争った為だったのであろう。その妙な言葉の意味が定かでないにしても、その異常さと前後の様子から、それは、相手に対して何か鋭い意図を秘めているらしい事を子どもは感取し、その言葉をしっかりと覚えこむ。そして機会をうかがい、その相手や第三者に、その言葉をなげかけてみる。するとその時示した異様で素早い相手の反応が、子どもを又次の機会にも使おうという誘惑にかりたてる。

こうして子どもの語いの中に「悪口」に関するものが次々とたくわえられてゆく。2)

〽バカ　バンまで　口あけろ

〽バカ　カバ　チンドン屋　お前の母さん

デベソ　んだからお前もデベソ

〽いじわる根性　しりまがり

〽ひとりふたり　サンめの子

山の中の　くそかがし

〽あの子どこの子　ミヤマの猿の子

わら一わもってこい　尻っちょまっ赤に

やいちゃるぞ

〽女をいじめるヤセ男　おふろに入って

浮いちゃった

〽女にからむヘビ男　女にまけるビキ男

〽男にかみつくブス女　ブタが顔みておどろいた

〽男と女と豆いり　にてもやいても

くい手がない

〽誰れかさんの頭に　チョンチョコリンが

とまった　早くとんねと　坊主になるぞ

〽誰かさんのうしろに　チョチョリンが

ついた

〽せおった　しょった　誰れかさんがしょった

〈泣きみそ三文目　よくないた五文目
〈泣きみそ　おこりみそ　丹後のえびす
　がたらんと　ワンワと泣いた

こうした一般的なものばかりではなく、その子の特長や個人攻撃も容赦なく行なわれる。3)

〈おたふく　三ふく　風がふいて　四ふく
〈おたやん　ころんでも　鼻うたん
　デベソがころんで　足つかず
〈おかめの　だら面ちょう　やけたらへっこんだ
〈おたふく　めふく　はちの咲いためふく
〈デブデブ　百貫デブ　電車にひかれて
　ペッチャンコ
〈デブ　でんぐりかえって　おなかがタイコ
　おケツがラッパ　プカドンプカドン
〈やせっポチ　コーロギの三年ぼし
〈ヤセ　のっぽ　ヒョウロヒョロ
　骨皮ギスギス筋えもん
〈佐藤　斉藤　犬のくそ
　阿部に渡辺　猫のくそ
〈カッちやん　カズの子　にしんの子
　おケツをねらって　カッパの子
〈カっちゃん　カズの子　にしんの子
　ネコにとられて　キャッキャッキャ
〈キいちゃん　木ねずみ　どぶねずみ
〈ケいちゃん　毛だらけ灰だらけ
　おしりのまわりがくそだらけ
〈キンちゃんのケツに　しらみが四ひき
　しがみついて　しんどった
〈ミッちゃん　道々　ンコたれた

こうした悪口うたをあびせられる時、その子はわが身の不運と、わが名の不幸を嘆ずるばかりでなく、そのくやしさや怒りから、あの憎き相手に痛撃を返さなければと思い、その相手の体やくせがなんであるかを見ぬき、名前をいれこんだ最高の悪口を考える。そして先ず

〈○ちゃん　○じゃないか　○って　○られて
　○ね山へ　○りこんだ
〈○ちゃん○んねんじ　○やま○んぶくろ
　○られてないて○っくり○っくり○んねんじ
〈○ちゃん○がつく○ンざえもん○公の
　○んむくれ○かけて○ちゃちゃ

という一般的な名ざしの歌の〇の所に相手の名をよみこんで、反撃を開始する。

ついでその当の相手が、何かを言いかけたり、返事の冒頭に次の傍点のような言葉を口にすると、すかさずその言葉のそれに応じて、

へあのねのカボチャ　ぶっちゃけた
へあらまあ　デベソの宙返り
　あんぽんたんの　ケツまがり
へなにはナットウ　こめこうじ
へおやまあ　ちゃりん　そばやの風鈴
へなんだは目から出る　カンダは東京
へああはあわめし　こうこに茶づけ
へいたいはイタチの　くそだらけ
へあいたい　どなたに　ぶすおんな

と浴びせる。相手がだまっていたとて決して許してはおかない。

へだまってダンゴ　ペチャクチャたべろ
へだんまりだん助　赤ダンゴ
うるさいとばかり遠くへ行こうとすれば——
へまけてにげてく　赤とんぼ

そしてまたひき返してくるなら——

へまたくるヤンマ　バカヤンマ

と執拗その上もない攻撃をくり返す。

子ども達の世界は、大人の考えるほど清浄無垢でガンゼない無邪気なものではない。大人の社会と同じように、或いはそれ以上に直接的で手加減せずに、非難・競合・侮蔑・嫉妬・反目のうずまく世界である。時にとっくみ合いやケンカが起るのも当然の事である。特に言葉によって相手を圧倒しようとする時、子どもはいつもの時以上に、語いのもつ意味や言いまわし、音韻や重語やリズム、かけ言葉やたたみかけといったものにまで敵意と呪咀の意志を集中する。それは全く自発的な意志がみなぎり、自主的な判断によって営なまれる積極的な世界である。こうした集中力や積極さによって、子どもは一歩一歩人間としての諸般の機能を身につけてゆく。それは発奮と陶冶の道行といっても差支えないだろう。

従ってこうした子どもの悪口うたやざれ事を、上品そうな家庭や情操教育を旨とする幼稚園などで、禁止したり、叱責するような事に対しては、全く逆に子どものこうした言動を面白がってけしかけたり、それを流布するのを事としているような「子ども屋」の行き方と同様に反対する。

子どもたちはそれなりのせい一杯の力をもって前人の行為をま

ねしたり、おかしいなと思ったり、同年の子と競ったり、反発して、生きぬこうと健闘しているのであって悪口うたも、そうした子どもの生活の一部、遊びの一つにすぎない。もし大人がその世界に介入するなら、先達者先験者たるにふさわしいものでなくてはなりますまい。子ども達の表面的な行為だけでなく、その底流にある心理や、いく重にも屈折し反映している心のひだをくみとり、それを子どもの成長と発展に資する大人の仕事として、活用する事が望まれようからである。

だから悪口うたの類を教育の場で教えたり分別ある大人がそれをはやしたてるべきものではない事は明白である。あくまでも子どもの生活の中でひろまったり、変貌したり、消表したりしてゆくものである。問題はそうした直接教育の場に使ったり、持ちこめないものだから全く無視したり、否定するのではなく、また反逆としてそれを採用する事だけに新しい意義があるのでもないという事である。その当の子どもの実体を把握する為その中に流れている子どもの積極性や向上する力を、大きく、大人自身の仕事の問題として、この見すてられていた「悪口のうた」に暖かい、そしてするどい目を向けたいと考える。

（つづく）

参考文献

1) 林賢之助・大熊喜代松「ことばの治療教室」日本放送出版協会（昭43）

2) 加古里子「遊びの四季」じゃこめてい出版（一九七五）

3) 茨城民俗学会偏「子どもの歳時と遊び」第一法規出版（昭45）

4) 加古里子「わらべ唄の世界」（国文学八月）学燈社（昭50）

子どもと天体

塚田幸子

現在小学一年生の長女Mは、星を見るのが大変好きで、星座にまつわる伝説や星占いの本を愛読している。この子の二、三歳代には太陽や月、星との興味深い出会いや関わりがあり、それらの体験が現在の興味や関心の重要な素地になっていると思われる。

M　二歳三か月十七日、二歳三か月十八日、二歳四か月十三日、夜、月と星を見つけて喜び母に知らせに来る。

二歳三か月十九日　夜、月を見て「お月様食べちゃう」と両手にとって食べる真似をする。

二歳六か月十日　午後、昼間の月を見て「お月様！」

二歳六か月十八日　母が書き物をしている傍で「お勉強」と言って前夜見た月と虹を描く。

二歳七か月十一日　午後、公園でブランコに乗っている時、厚い雲の間から微かに顔を見せた太陽を見て「あれなあに？」と言う。「お天道様」と答えると「ふーん」と言う。

二歳十か月九日　母の帰りが遅かったので、泣いて母にだっこする。母の膝に抱かれたまま母に絵を描いて貰って喜ぶ。「お天道様」「お家」「お花」の絵を描いてと言う。

二歳十か月十日　母と公園でブランコに乗る。「お天道様がニコニコしてる」と言う。ブランコを降りて走り出し「お天道様と一緒に走ってるの」と言う。走って見ると太陽は本当に私たちと

一緒に走っているように見える。一番高い滑り台に乗ってMは「お天道様！」と何度も叫ぶ。大きなジャングルジムの中に入り、「お部屋」と言う。

二歳十か月十一日　朝、家の中に陽が差し込んでくるとMは「お天道様がお家の所に来た！　お天道様がニコニコしてるでしょ」と言う。

二歳十か月十三日　夕方、買物に行く時、満月を見て「お月様ニコニコしてる」と言う。

二歳十一か月一日　夕方、買物の帰り道、三日月を見て「お月様って可愛いの、Mちゃんと遊びたいって」と言う。

三歳一か月〇日　久し振りに晴れた朝、目が覚めて居間に出て来ると直ぐに「お天道様、今日は」と言う。ベランダに出て「お天道様いらっしゃい」と言って部屋へ入り、「お天道様2つ付いて来た」と自分の後を指差す。

三歳一か月二日　夕方、電車の中で「お天道様どこ？」と尋ねる。

三歳一か月十九日　夕方、いつもより遅い時間に買物に行く。もう暗いので太陽は見えないがMは「お天道様、後ろに付いて来てるの」と言う。母が「今日はお天道様はもういないの」だと言うと悲しそうなくやしそうな顔をして「お天道様はお家にいるの！」と言う。

三歳二か月〇日　電車の中で飽きて来て横になると夕陽が顔に当り「眩しい」と言う。「お天道様が『今日は』って来たのよ」と言うと本気で起き直って「お天道様今日は」と深々と頭を下げる。あまりの真剣な表情に思わず笑ってしまう。

三歳二か月十二日　夜、祖母と二人で銭湯へ行き、帰って来ると母に「こんなに大きいお月様だった」と両手を広げて見せる（満月）。

三歳三か月四日　夕方、買物の帰り、三日月を発見して「あっお月様！」と言う。「お月様シュッ、Mちゃんの所に来たの」と言って月の方に手を伸ばしてからそっと手の平を広げて見せる。

三歳三か月六日　夕食後「どこかへ行きたいの」と言う。ひとりでベランダに出て「ママ、」と言う。下を見降ろして「お花」と言う。小手毬の花が満開であった。

三歳三か月七日　「夕方だからお家に帰るの」日が長くなったので外はまだ十分明るいのに買物に行って帰ってきたせいかそう言う。

三歳四か月三日　夕方、四時前に月を見つけて「月」と言う。「もうお空がオレンジ色になって来た」と言って家に帰って来る。もう外へは行こうとしない。夕食後また外へ行きたいと言う。買

物に行く。シャボン玉が買いたくて泣く。「お月様に笑われるよ」と言うとMは「お月様は笑わないの！　泣くの！　お天道様が笑うんだよ」と言う。

三歳四ヵ月十一日　夜、雷が鳴り出すと恐がって自分の布団から母の布団へ移って来る。（雷に）「あっち行って！」と叫び、母にもそう言ってと言う。「恐くないよ。この（布団）の中にお天道様が一杯いるから」とも言う。

三歳四ヵ月十二日　夕方、買物に行く時甘えてだっこする。「お天道様、ママに付いて来た」と言って夕陽の当っている母の背中に触る。

三歳四ヵ月二十八日　外出の途中で母にだっこする。夕陽を見て「お天道様、Mちゃんにだっこしてるの」と言う。バスの中で三日月を見つけて騒ぎ、「どうして付いて来るの？」と言う。「Mちゃんが好きだからでしょう」と答える。

三歳五ヵ月三日　夕方、半月を見て「三日月！」と言う。「どうして付いて来るの？　どうしてかなって言って！」「お空も付いて来る雲も付いて来る」夜、父親が外へ出て行くのを見て「パパの所へ行く」と出て行き帰って来ると母に「お月様も付いて来たの」と自分の後ろを指差して言う。

三歳五ヵ月二十日　山小屋で満天の星を見る。

三歳六ヵ月二日　バスの中で半月を見て「Mちゃんの所に一杯来たの。Mちゃんに付いて来る。（月を隠す雲を見て）雲って意地悪！」と言う。

三歳六ヵ月十五日　夕方、買物に行く道で「お天道様ここに一杯降りて来た。お月様はお家にいるの」と言う。

三歳六ヵ月二十三日　「お日様はお家でビスケット食べてるの、お月様はお母さんといるの」

三歳六ヵ月二十四日　買物の帰り夕立に会い、「Mちゃん雨好きだよ。雨って優しい。雨とお手々つないでるの」と言って雨を手の平に受ける。「お月様はお家にいるの」と言う。

三歳八ヵ月二十日　「お星様が一杯、お山みたい」と言う。

三歳八ヵ月二十一日　夜、裸になると布団の上を泳ぎ回り喜んで「おロの中にお天道様とお月様が一杯いるの」と言う（この頃毎晩）。

三歳八ヵ月三十日　夜、裸になると布団の上で泳ぎ、「おロの中にお天道様とお月様が一杯いるの。この（お腹の）中に入っちゃったの」と言う。

三歳九ヵ月五日　ハンカチを持って眠る時、母と引っ張りっこをすると言う。「引っ張るとボロになっちゃうの。ボロのパンダちゃんのハンカチお山で失くしちゃったのね」と言う。「風で飛

ばされてお星様の所に行ったんでしょ」と言うとMは「違うの、お天道様の所、ママのお財布はお月様の所へ行ったの。このハンカチはお星様の所に行くの」と言う。

三歳九か月十二日　朝、ベランダから陽が差し込み、Mの持っていた風船に映る。それを見て「お天道様が風船に入っちゃった」と言う。「また入れちゃった。あっ消えちゃった……」と繰り返す。

三歳九か月二十二日　坂道で三日月を見て「お星様食べたい」「お手々にとって食べたら?」「アム、食べちゃった」

三歳十か月八日　星空を見て「十条にもこんなお星様があるなんて初めて！　パンダちゃんのハンカチお星様の所にいるの。あっ光った！　お星様もお月様もお天道様もお腹の中にいるの。野菜食べてるの。クッキーも、あんなに大きいお月様！」

三歳十一か月五日　母の布団に潜り、「この中にお日様とお星様とホットケーキが一杯いるの」と言う。

自分の二本の足で歩き始めた子どもは、足下の大地には安定や拠り所を見出しながらもその重々しい束縛から自由な存在、頭の上にあってしかも落ちてこない天体や飛行物に大きな興味や関心を抱くようになるのであろう。Mと月、星、太陽との出会いは、以上に記されたように、こうして二歳代のことである。飛行機が好きだというので、飛行場へ連れて行ったのも二歳二か月のこと、Mには地上にある巨大な物体が空へ上がって行くことなど思いも寄らなかったらしい。何度も何度も「飛び立つ」飛行機を見ては、いつも見慣れている大きさにまで小さくなると初めてあの「ヒコーキ」とわかるらしく、パッと喜びの表情を表わすのだった。

生まれてから様々な物と出会い、それらを口に含んだり手で玩んだりして、ひとつひとつ自分の世界に取り入れてきた過程は、月や星や太陽においても想像のレベルで繰返されている。私は、Mにその術を教えたわけでもないのに、何の苦もなく彼女が見事に月を食べてしまったので全く驚いたり感心したり、今も強く心に残っている。(この想像力や空想力といったものは、言葉の発達も他のすべての発達も途上にある幼ない子どもにとってだけでなく、未知の物に対しては、おとなにとっても有効で有力な武器になるという点で非常に重要なものだと考えたい。)

Mが太陽と一緒に走っていると言う時、頭ではそう見える理屈がわかっているけれども、そういう傍観者的な立場から一歩踏み込んで、彼女と共に走ってみると、彼女の言葉は、私にとっても

内的な事実と思われ、彼女の発見や驚き、喜びがすべて私自身のものとなって、心底共感できた喜びは感動的とも言える程であった。反対に、Mが、太陽が後ろに付いて来ていると言った時、夕陽を背中に浴びながら買物に行く毎日は確かにそうかもしれないが、この日はもう暗いのだからと、頭で考えて否定した私の目には、次の瞬間、Mの悲しそうな悔しそうな顔が飛び込んで来る。そして「失敗した」と感じている。

それまでの経過から、Mの感じ方、捉え方を尊重し、彼女の納得する表現の仕方をしようと、私は、周囲のおとなたちの気遣いから半分戸惑いながらも、夕陽が眩しいと言ったMに「お天道様が『こんにちは』って来たのよ」と答える。すると、Mは真剣になって「こんにちは」と頭を下げる。Mと同じように全身で対応して行けば、私は彼女の感じたものにずっと近い体験ができるであろうと思いつつ、何のてらいもなく、全く自然な形でそれができるMを心からいとおしく、また誇らしい存在と感じた私である。

このような日々の関わりを通して育っていく愛情というものは、ほんのちっぽけとも思える事によって確かめられ、強化されていくのだが、私は、Mの短い言葉、詩のような表現の中にそれを見出す事が多くあった。こうしてMにとって月や星や太陽はあたかも母である私と同じようにいつも自分と共にいる（「どうして付いて来るの？」）親しい存在となっていく。毎夕の母と一緒の楽しい買物の行き帰り、二人に付いて来る太陽や月は、Mが母に抱かれればそれらもMに抱かれ、Mは同時に二つの体験をしている。Mが母になって太陽となった自分自身を抱いていると考えると、Mは自分を抱いている母の気持ちと、抱かれている自分の暖かさ、心地良さと同時に感じているのだと言えよう。Mは言う。太陽や月、星が家の中に、布団の中にいると。果てはロの中やお腹の中まで一杯詰まっていると。Mに付いて来た太陽や月は目には見えなくともずっとMと共にいるのだろう。一緒でない時は、友だち（よその家の子ども）のように、Mと似たような生活をしているのだ。Mが夕食時に母のいる家に帰るように。家の中、布団の中、口の中、お腹の中に共通するイメージは暖かさ、安全ということだろうか。そして、順次、太陽や月がMの奥深くまで取り込まれ、ついには飲み込まれてしまったことは、Mがこれら天体をすっかり、自分なりに理解し終えた事を意味していると思われる。星も月も太陽もすべてお腹の中に入れられ、それら天体が野菜やクッキーを食べているとMは言う。この時もまたMは、二重、三重のイメージを語っている。星や月や太陽となってお腹の中にいるMは、それ程遠い昔のことではないが、Mの最も

奥深い記憶の中にある、母の胎内にいた幸福な自分を語っているし、星や月や太陽となって野菜やクッキーを食べているMは、母の手になる料理やお菓子を食べて口もお腹も満たされた最も幸福な状態を語っている。そしてまたそういう二つの状態を共に丸飲みにして抱え込んでいるという事が、Mの天体の理解や幸福のイメージの統合、完成を言い表わしている。これをおとなの言葉で一言で言ってしまえば、「しあわせ」ということになるのかもしれない。けれども、Mはまだそういう言葉を知らない。抽象的な表層のものでなく、Mがもっと具体的な生き生きとした世界に住んでおり、Mの知る限りのもので精一杯表現した結果なのである。

天体に限らず自然物に接する時、私自身、すぐに科学教育ということが頭に浮かんで、それをどう子どもに説明しようかと考えたくなる。けれどもそんな事で悩んで口をつぐんでいる時、Mはいつも自分の見方を何と素早く示してくれたことだろう。Mはいつも自分自身の目で見、耳で聴き、膚で触れ、心で感じた事をそのままの形で表現している。私はその都度、自分は心の目を開いていなかったのだと痛感させられ、彼女の言葉に行ないに首肯かざるを得ない。教えられているのはいつも私の方なのである。

山小屋で満天の星を見た時の事がMの後の星に対する興味や関心のもとになったようだが、この時、Mがどのような思いで星を見つめていたのか私にはわからない。満天の星を見て一番喜んだのは私自身であった。都会で見る星空とは大違い、空に穴が開いたという形容がぴったりの明るくて大きくまたたく星々、まばたきする間にも現われては消える幾つもの流れ星、いつまでも見飽きる事のない光景を、まるで子どものように感嘆の声を上げて見上げていた私であった。

夏の夜空では見られないけれども、秋、冬ともなれば都会でも美しい星空が見えるようになる。そんな夜、Mは空を見上げて、山で見た星空のようだと喜びの声を上げる。

それからは、花や虫についてその名前や生態を知りたくなるのと同様、星座や星の名前をもっと知りたくて、Mと共に私も、本を読んだり、プラネタリウムへ行ったりして情報を仕入れ、星座盤を抱えては、晴れた夜、星を探すことに精を出すようになったというわけである。こうして行動を共にしている時も、恐らく、Mと私とでは興味の中心は違っていることだろう。しかし、それでいいと思っている。MはMなりに、私は私なりに、一番心魅かれるものを追い求めて行きさえすればよいのだと思う。

保育の体験と思索

――子どもの世界の探究（二十九）――

津守　真

五歳児二学期

はいってくれない？――いれてあげることと いれてもらうこと

九月十二日

二学期が始まって二日目である。

部屋の隅では男児数名がつみきと電車をしている。机の上ではかいたり作ったりしている子どもたちがいる。遊戯室との間を往ったりきたりしている子どもたちなど、それぞれ何かしている。

私は製作をしている子どもたちのわきの椅子に座っていると、後から急に男児Mが肩を叩き、「おじさん　はいってくれない？」と言う。

Mが遊んでいる部屋の隅には、つみきが並べてあり、トンネルの部分や坂道などがあって、線路のように長く伸びている。男児M、T、Ms、Kらが画用紙で作った電車を動かしている。私はそこに腰をおろす。つみきの上を、自分で作った画用紙の小さな電車を動かしたりとめたりするのは、そのことに向い合ってみると、

落着いた面白さであることがわかる。私はMに呼ばれて入ったのだが、だれもそれ以上私に期待しているのでもなさそうである。しばらく私はその中に座って見ていたが、私も何か作ろうと思い、画用紙を簡単に折って信号機を作り、そこに立てると、「あ、信号でしょ」と云って、忽ち子どもの所有になる。私も画用紙で赤い地下鉄を作ってつみきの線路の上におくと、「地下鉄はこちらです」と、トンネルの中の方にいれる。私は自分で動かせる自分用の電車を作りたいと思い、もう一つ小さな電車を作ると、「あ、いい」と言って誰かが持っていってしまう。

「はいってくれない？」と言われたとき、最初、私は何かをたのまれるのかと思った。かいてくれとか、押さえてくれとか。ところがじきにそうではないことがその場でわかった。そう言った子どもも、私に「はいってくれない？」と言ったことを忘れてしまったかのように、自分のことをして遊びつづけていた。「はいってくれない？」というのは、遊びにいれてあげるという子どもの好意だったようである。注

くるくると遊んでいる子どもたちの中に腰をすえて座ってみると、全体を眺めて座っているのとは違ったものが見えてくる。自分で画用紙を切って箱のように作り、赤や青、黄色で好きな色にぬった小さな電車を、自分の手で動かして、トンネルの中をくぐらせ、車庫に並べたりするのは、そこで遊んでいる者にとっては、ひとつの小さな世界であり、その瞬間には、全世界でもある。その動きの中にある落着きと面白さは、こうして中にいれてもらわないと、伝わってこないだろう。こんな遊びがまだ面白くてたまらなかった小さいころの感覚が心の中に甦えるのはこういう瞬間である。私はただ見ているだけではなくて、自分でも何か作ってみたくなり、画用紙を切り始める。信号機や電車を作ると、だれかが「あ、いい」と言って忽ち持っていってしまう。次第に自分でも気に入った電車が作れるようになる。自分で赤い地下鉄など作って、手でもって動かすのは愉快なことである。

私はつみきと電車の遊びに入れてもらっていて、子どもたちがそれぞれ自分の遊びを落着いて遊んでいることに印象づけられた。私はそこで面白く見ているだけでもよかったが、自分の面白さを追求できたことは一層よかったと思う。こういうことからみ

ると、遊びにいれてもらうというのは、お父さんの役をとるとか、運転手になるというような活動の機能の一端をになうことにとどまらない。めいめいが遊んでいる中で自分も自分の遊びを追求することが、遊びにいれてもらうことである。自分の追求するものがなくて、他人に対する指図や干渉が多くなると、次第に遊びにいれてもらえなくなる。こうして、子どももおとなも、それぞれが自分のことをしながら、その中で互いに相手のしていることを取りいれているのである。

私が子どもの遊びに参加する仕方について、このクラスの子どもたちとの三年間にわたるつきあいの経過を最初から考えてみると、いくつかの段階があったように思う。最初のころに、私が遊びにいれてもらえるかどうかをためされているような時期があった。(そのことについては、このシリーズの(5)に記した。)その後、何かをしてくれと頼まれて遊びに入ることがしばしばあった。(肩車してくれといわれる(16)、かけっこしようといわれる(17)、砂を掘るのを手伝えという、一緒に山にいってくれという(18)、自動車をかいてくれという(19)、など)。きょう、この場面では、私は特別にその子たちのために何かをする必要はなく、一緒にいて自分のために遊んでいればよかった。五歳の二学期になってそこまで成長したのだと云えよう。もちろん、これは明瞭に区切られた段階ではなく、どの時期にもいずれもが織りまざっているのであるが。

これから先、子どもの年齢が大きくなるほど、直接に子どものために何かをするよりも、おとなも自分のことを追求しながら共に生活することが多くなるであろう、更に、高校生、大学生になれば、一緒にいるおとな自身が真剣にとり組んでいるものを持って、人生を追求していることがもっと大きな意味をもつようになるであろう。これはおとなにとっては大変なことであるが、プラスの点でもマイナスの点でも、青年は人間や社会の基本的なことをおとなを通して学ぶのであると思う。

幼児期から児童期、青年期への移行は、具体的な生活面をみると、異質なものへの飛躍がある。しかし、その根底にある子どもとおとなとの関係については共通なものがある。遊びにいれてあげることと、遊びにいれてもらうこととは、子どもの側も、おとなの側も、それぞれが自分の遊びを追求することができるようになっていることが前提になっている。幼児期には、おとなも幼児の世界に入って、その中でできることを見つけるのであるし、青年期には、共通の人生の地盤に立つことができる。そして子ども

が自分で遊びを追求するところまで育てることが保育であるということもできよう。

「はいってくれない？」と言って私を遊びにいれてくれた子どもの世界には、自分でやっているから誰に入ってこられても大丈夫だという自信と、おとなでもいれてあげるという寛大さがある。いれてもらうのにふさわしい者となるのにはどうあったらよいだろうか。それはおとなに課せられた課題である。

注　日本語で「入る」は、内に入るの意であって、内部空間が想定されている。印欧語系の言語でも、語源的には家に入ることがもとになっている。(Buck : A dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages)

子どもから自発的に遊びにいれてくれるときには、単に活動に参加させてくれるというだけでなく、子どもの家の中に、内面空間に入ることを許されたと言えるだろう。

ここでもう一つ注目したいことがある。それは、この日が二学期が始まって二日目だということである。長い夏休みが終って、幼稚園や学校やつとめにゆかなければならないということは、多くの人にとって、緊張や不安を伴う。そういうときに、幼稚園にいって、いつものように、自分自身のペースで遊びをつづけることができるということは何と有難いことであろうか。子どもは忽ち幼稚園の生活に新たな生きがいを見出すであろう。最初の日から始業式や新たな課題で不安と緊張が増大させられたら、幼い子どもにとって、どんなに負担になることかと思う。幼稚園の年長組の年齢は、丁度、新学期の憂鬱を感じ始める時である。

次に掲げる新学期直前の家庭での子どもの記録はこのことを示すであろう。

新学期がはじまる——未来への不安

八月三十一日

夕飯の祈りのとき、五歳のAは「あしたからおにいちゃんの学校がはじまりますが、ちこくしないようにしてください」とお祈りした。母親が「よかったわね、Aちゃんにお祈りしてもらえ

て」と言うと、九歳の兄は「じゃあ、九時に出てもちこくしないの？」と言った。すると四歳の妹が、「ちがうわよ、そんなにおそく出ないように、神さまが守ってくださるのよ」と言う。

夕飯のときの子どもの家庭生活のひとこまである。小学校が明日から始まるという日、幼稚園の妹も気が落着かなくなる。幼稚園がはじまったら遅刻しないようにということを早くから心配していることがわかる。

九月四日

Aは夏の終りごろから、私にべたべたくっつくことが多い。ねころがって、「あちょこのなかに、ハクチョクチェメント（白色セメント）はいってるの？」など、赤ちゃんことばで、私の腕にからみつく。同じことを何度でもうるさくきく。（夏休みに、白色セメントを使ってタイル貼りをして遊んだ。）

私が原稿を書いていると、「そこで何やってんの？」「原稿かくの？」「どうして原稿かくの？」「これもお手紙なの？」「なーに？」「なーに？」と何と答えてもたずねる。

A「おとうちゃま、今晩からどこにいくの？」
私「宇都宮」
A「うつのみやってどこ？」
私「汽車に乗っていくの」
A「どこ？」
私「汽車に乗っていくの」
A「どこ？」「どこ？」
私が何度言っても、「どこ？」「どこ？」ときく。

ねころがってベタベタくっついて、ことさらのように赤ちゃんことばを使ってまといつかれると、思わずふりはなしたくなる衝動を覚える。

しかし、これは考えてみると、子ども自身の心に何か屈託があるから、こうしているのである。こういうときは何かあると思って、おおらかに扱っていないといけない。後になって考えるといろいろのことが見えてくる。

ことさら赤ちゃんことばを使うというのは、赤ちゃんの状態にもどりたい時だろう。赤ちゃんならば家の中にいられるし幼稚園にいかなくてもよい。本当の赤ちゃんだったら、家の中にいても、心は未来に向っている。しかし、そこを通り過ぎた子どもが赤ちゃんになりたいときには、その心は未来よりも過去に向っているのだろう。未来を拒否しているかもしれない。過去と未来とが通い合っていない。

こういうときには現在に対しても不確かさがあるのだろう。「そこで何やってんの」「どうして」「なーに」「なーに」と質問してまといつく。これも何か返事を期待しているのではない。揺れ動く自分の不確かな心を、もっと大きなものに寄り添わせたい気持であろう。くり返し同じ質問をしてまといついてゆく。

未来に対して不安があることは、次の質問にはっきり現われている。「こんばんからどこにいくの?」「宇都宮」と答えても、「どこ?」「どこ?」とたずね、何と答えても、「どこ?」「どこ?」と際限なくきく。父親がこれからどこにいくのかという未来に対する関心である。宇都宮と答えても、子どもにとってはそれは何の意味もないことは明らかで、もっとていねいに学校との関連で説明すればよかったのではないかと思う。子どもにとっては、九月から始まる未来が見えていないのである。

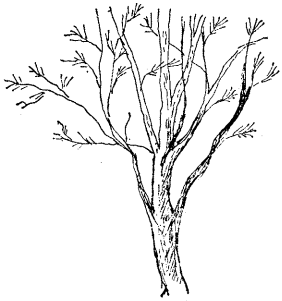
人は自分の未来に不安があるときに、関係の深い人の未来にも関心をもつ。まして幼児の場合には、具体的生活空間は限られ、具体的な周囲の状況に依存する度合も強いので、直接に関連の深いおとなの動向には大きな関心がある。子どもにうるさくたずねられ、まといつかれるとき、それをふりはなすならば、子どもの不安は一層大きくなるだろう。子ども自身の心の整理がついてくれば、からむ手は自然にとけてくるだろう。

新学期に再び幼稚園にいって、そこで十分に遊ぶ生活が確立し、自分らしく生きることができるようになれば、過去と現在と未来は調和して一つにとけ合ってゆく。それだからそれぞれの子どもが自分らしく生きられるように毎日の生活をつくってゆくことが保育の絶えざる課題となるである。新学期の第一日から、幼稚園で自分らしく遊べるということは、子どもにとって幸せなことである。

新学期の前は、子どもにも不安があるが、おとなもまた同様である。ある学校の先生は、新学期の前になると胃が痛くなり、御飯が食べられなくなるという。ある大学の教授は、新学期の最初の講義の前晩は眠れないという。その不安の強さは人によってまちまちであるけれども、だれにでも多少の緊張があることは共通である。また、その緊張や不安の度合は、受けいれ側の状況にも関連がある。前晩には心配があっても、行ってみたら自分のペースで動くことができたというようなときには、じきに新たな希望が生れてくる。新学期が進むにつれて、どの子どもも、それぞれに應じて、一段階上ったところで、新たな生活を作り上げてゆくであろう。そして間もなく、秋の爽やかな充実した日日を私共は予期している。

丁度そういう時期に、九月早々から、幼稚園や学校では運動会の練習がはじまる。そうすると子どもはそれぞれ自分のペースで遊び、生活することが困難になる。新たな不安と不満が生じる。秋にはその他にもいろいろの行事がある。落着いて幼稚園の中で十分に遊ぶことのできる日日を確保することができるだろうか。五歳児の二学期と三学期は、私のささやかな経験の中でも、子どもが最もよく遊ぶ時期である。幼児期の遊びが一つの最高潮に達する時期である。このあと児童期になると、子どもはよく遊ぶけれどもその質が変化してゆく。いわば幼児期の遊びが花開くこの時期に、子どもが十分に遊ぶことのできる生活を作ることは、幼稚園にとっても、家庭にとっても最もたいせつな課題である。

（つづく）



文部省「幼稚園教育百年史」の刊行

このたび、文部省より、幼稚園教育百年史が刊行された。さきに、幼稚園教育九十年史が刊行されているので、重複する部分も多いのは当然であるが、百年史として構想を新たにして編集されている。九十年史では、幼稚園の制度、普及、教育課程と指導法、教職員、施設整備など、事項別に構成されているが、今回の百年史では、全体が年代順に構成され、戦後編に多くの紙数が増し加えられている。その他、写真なども新たなものが加えられていて面白い。資料編には、幼稚園教育百年史年表、教育法規、通達・文部省年報・文部省日誌、教育統計、その他が収載されていて、幼稚園関係の資料集としての価値がある。とくに教育統計については、明治九年から昭和五十一年までの幼稚園数、幼児数、教員数、就園率、保育所の施設数、入所児童数、地方別・年代的推移、その他幼児教育に関する実態調査などの詳細な数字が掲げられており、大変に便利である。

わが国の幼稚園は、官立のもの私立のものなど多種多様であり、個人の有識者の力も大きな役を果していて、その歴史を記すには、多角的な眼を必要とする。九十年史はその多様さをよく反映していて読みものとしても面白かったが、今回の百年史も、その点では同様の成功をしていると思う。明治以来のさまざまな施設の写真、平面図などを見るだけでも、興味深い。

今回の百年史の結語には、幼稚園及び幼児教育の課題として、幼児を取り巻く環境の変化などいくつかの点が指摘されている。都市化に伴う住宅環境の変化、家庭教育との関連、幼稚園と保育所との問題、小学校教育とは異なったものとしての幼稚園教育の特色等、現代の幼稚園の当面している諸問題が挙げられている。むすびに適切に記されているように、幼稚園教育は小学校教育への準備教育ではなく、幼児期にふさわしい教育を探究してゆくところに今後の大きな課題がある。

（ひかりのくに　昭和五十四年
定価　一、二〇〇円）

幼稚園で

画用紙の切れはしに、私は錯画のような線がきをしていると二人の男の子が寄ってきた。こういうとき、どんな子どもでも、このくらいなら自分でもかけるという気を起すことが出発点になるので、私は、形のあるものをかかないことにしている。この日も、はじめのうちは、「なんだ　こんなの」とか、「ぐしゃぐしゃにしちゃうぞ」とか言って、私のかいた線の上にクレヨンを叩きつけたりしていたが、画用紙の切れはしを何枚も机の上に出しておくと、いつのまにか、それぞれ、一見わけのわからない線をかきはじめた。

一人の子どもは、「みみず」と言って、長細い形をかきはじめた。「なめくじ」「毒がある」など言いながら、次第にていねいにかく。この子どもは、泥んこが好きで、土をべたべたにして遊ぶ子どもである。私はこの子がみみずやなめくじをかきはじめたのを面白く思った。

もう一人の男の子は、「こわいのだぞ」「もっとこわいのかく」と言って、うすくひょろひょろした線をかいていた。そのうちに、目に放射線を何本もかいて、「どうだ、こわいだろう」と私にみせる。この子どもはよく私にとびかかって暴れる子どもである。「目」と「こわい」ということと関係があるのだろうか。

一時間近くこうして坐っている間に、画用紙の切れはしにかいた何ということもない画であるが、両方で十二枚になった。私は自分が坐っていたところから、この二人の男児の画のシリーズが生れたことに満足を感じた。そして、この日はきっと、この子どもたちは家に帰ってからも、落着いてきげんがよいだろうと信じた。こういうことは保育者はだれでも経験しているであろう。けれども、他の人にはだれも分らないことである。母親にも分らないことである。幼稚園の保育効果というのは、こういう目に見えないところにある。子どもだけはそのことを知っていて、その次に会うときには親しみをもって寄ってきてくれる。

国際児童年であったこの年も終る。目に見えないところで日日子どもの生活の支えになっている保育者に、よき年が訪れるよう願うものである。（津守　真）

＊　＊

プレゼント用品

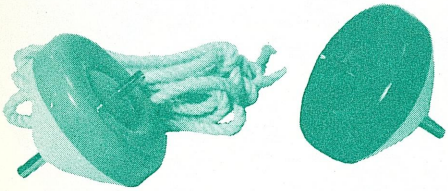
幼児用ジグソーパズル

●この遊びは、園児の頭の回転を早くし、考える力や忍耐力を養う事が目的ですから、できるだけ自分の力でやらせて下さい。
●最初のうちは、園児もとまどいますが、そのとまどいが考えるきっかけになります。
●何回かくりかえすうちに、みちがえるほど判断力や推理力がつき、自信がついてきます。
●ジグソーパズルを、バラバラにする前に、絵をよく見て、園児に何の絵なのか、何の場面なのか、よく理解させておけば、パズル遊びに一層の興味をもちます。
●パズルの裏面に「すごろく」遊びがついていますので、楽しく遊んで下さい。

幼児用ジグソーパズル〔A〕
ブルートレインふじ
●絵・藤井康文●
〈50ピース〉ビニールケース付き　**250円**

幼児用ジグソーパズル〔B〕
しらゆきひめ
●絵・草間眞之介●
〈50ピース〉ビニールケース付き　**250円**

安全コマ〔スーパートップ〕



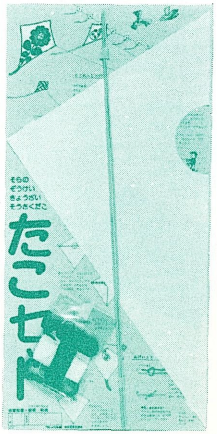
橙・緑(ヒモ付)　各350円

★安全性が高く、よくまわります。
★上・下の芯が独立していますので、手や板にのせてまわしたり、2個重ねてまわしたりできます。

ABS樹脂製

幼児用たこセット

★園児にも簡単に作れます。
★自分のすきな絵がかけます。
★お正月はたこをあげましょう。



●合成紙
●糸巻(1ケ)
●糸(20m)
●糸目
●竹ひご(2本)
●テープ

1セット　270円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

楽しさそろった!!

さくひんホルダー

じゆうがちょう

せいさくちょう

すいさいあそび

シールあそび

つうえん用バッグB

55年度

新学期用品

より豊富に種類をとり揃えました。

更に内容を充実しました。

フレーベル館の保育教材は、幼児が楽しみながら、しかも使いやすさを充分考慮して作られています。

キンダー粘土ケース(並)

マックスマーカー

キンダー版画セットB

園のたより

おたんじょうびおめでとう

れんらくぶ

おたよりはさみ

ピック

歩行者ワッペン

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館